

中学校の部 最優秀賞

枝 豆

墨田区立堅川中学校 一年

田 端 浩 充

僕は夏休み中に枝豆を育てることにした。きっかけは学校の選択授業「技術」で、校庭の隅でナス、キュウリ、オクラなどを栽培していたのを見て、僕も何か育ててみたいと思ったからだ。学校の菜園は小さいが、作物が何種類も育ち、緑があふれている感じがした。僕はその菜園を見ているだけで落ち着き、けっこう好きだった。

僕は以前、一度ベランダにナスを植えたことがある。この時は何も考えずに植えたため、水はけや栄養も悪く十五センチ位伸びただけで茶色くなって枯れてしまった。その時はすぐくしょくで、自分がきちんと育てなかったことを後悔した。今度こそ鮮やかな緑色の元気な作物を作れたらいいと思った。

そして、家の近くの「○○屋」という店に種を買いに行った。いろいろな植物の種類があり、どれも興味を持った。枝豆を買った理由は母がよく「夏はビールに枝豆だ。」と言っていたのが何となく耳に残っていたためだ。

最初はベランダが汚れるとか油虫が来るとか、母はよい顔をしなかった。しかし、粘ったら、今度こそきちんと育てることを条件に許可してくれた。

いよいよ植えることになり、まず土とプランターが必要となった。でも全部そろえるには、予算がなかった。もう一度お店に行き、とりあえず肥料の入っている腐葉土と、普通の土を買い、混ぜて使おうと思った。プランターは特に困った。種を多く植えるので、できるだけ大きなものが必要なのだが、あまり適している物が無い。そこで生協から届く白い発砲スチロールを母に内緒で使った。水を抜く穴はきりであけた。その後、箱を見た母は「エーッ」と言ったが、僕は聞こえないふりをした。準備ができ、善は急げで、その日に種を植えてしまった。何だか自分の作品ができあがっていくようでワクワクして床に就いた。とても暑い夜だった。

そして次の日、発芽した。これにはさすがに驚いた。少し前に、宮崎駿の「となりのトトロ」という映画を見ていたので、現実にはありえないけれど、トトロが来ておまじないでもかけたのかと思ってしまった。それから水をあげ、芽をじっと見てみると、見れば見るほどうれしくなってきた。それから毎日毎日水をあげた。すると、見るたびに大きくなっていった。毎朝起きるとパジャマのままベランダに出て水をやり、じっと見ていたので姉が「年寄りみたい。」と冷やかした。

でも、昨日より今日、今日より明日と、少しでも伸びていないかが楽しみで、ついじーっと見入ってしまうのだ。

お盆の時期に、三日間旅行に行き、留守にした。その間はもちろん水やりができなかった。帰ってきた時に、土に近い茎の部分が少し茶色に枯れはじめていて焦った。やはり植物でも動物でも、生きているものを絶えず世話するのは大変なことだ。あわてて水をやり、液体の肥料をやったら、数日

で元気になったので、安心した。

今回、僕は作物を育てることの難しさ、喜びなどを知った。僕の枝豆は、ベランダの小さなプランターだけれど、そこに生きている鮮やかな緑があるだけで、何となくほっとした。そして、同時にがんばって伸びている枝豆を見て元気が出た。学校の菜園もそうだが、同じように街全体に生きている緑がたくさんあれば、皆がほっとした気持ちになり元気が湧いてくると思う。

今、僕の枝豆は、三十本ぐらい育っていて、大きさは、僕の腿ぐらいのところまで伸びている。もう食べられるほどの枝豆がいくつもついている。

僕は、この枝豆を感謝して食べたいと思う。きっとおいしだろう。

中学校の部 優秀賞

将来と職業

港区立朝日中学校 三年

深 石 梨 歩

「職業」と聞いて、私はいろんな職業が思い浮かびます。もちろん、私の知らない職業はまだあると思います。ですが、将来はそのたぐさんの職業の中からどれかを選び、仕事に就くのです。今の私の学年からすれば、少しずつ将来のことを考え、進路を決めなければいけません。将来の夢があ

れば、どんな進路をとるのかも、はっきりさせていかなければいけません。ですが、どんな職業にも、苦勞する部分があります。それを身をもって体験したのが、二年生の時のインターンシップでした。

二年生の時の私は、夏休みに職業体験ができると、とても楽しみにしていました。体験できる職業は限られていて、私は小さい子の相手をするのが好きだったので、将来の夢という訳ではなかったのですが、保育の職業を選びました。体験期間は三日間で朝から夕方の五時頃まででした。体験内容は主に幼児さんたちの世話、プール後の後片付けなどでした。私の担当は三歳クラスで、他の友達もまた別々のクラスを受け持ちました。幼児さんたちは元気いっぱい、そんな幼児さんたちの相手をしている保育士さんたちは、とても信頼され、頼りにされ、しっかりした方々ばかりでした。もちろん、私は保育士さんたちの様に幼児さんたちとうまく相手することはできませんでした。それでも私は私なりに幼児さんたちと接し、あっちに呼ばれ、こっちに呼ばれ、と大変でしたが、無事三日間を終えました。

その時は、無事三日間を終えた安心感でいっぱいでした。ですが、今改めて職業・保育のことを考えてみると、パッと思い浮かんだのが、どの職業も体力を必要とすることです。必要なのは、これだけではありません。その職業に対する熱意、努力、商売なら客に対する接し方など必要です。もちろん、その職業によって必要なものはそれぞれです。

今、世の中を見てみると失業したり、ニートが増えたりと、職のことで困っている人もたくさんいます。

そんな事をニュースで耳にしたりすると、これはきちんとした進路や夢を持てなかった結果ではないのだろうか、時々思います。夢を追いかけて、それに合った進路や、それに必要な資格を持っていれば、そんな事にはならなかっただろうとも思います。

しかし、簡単に夢を持つと言っても、そんな簡単な事ではないことも分かっています。将来の夢が決まった、というのは言い換えれば、将来の夢が見つかったということで、具体的に夢が決まっている人は、きっと何かのきっかけや、出来事があったから、その夢を持っているのではないかと私は思います。

職業と夢、何かをする事が夢である人もいれば、何かの職に就く事が夢の人もいたり、様々です。職業と夢は、必要なものだと思います。

また、職に就いている人は何か事情があり、その仕事に就いている人もいれば、昔からの夢だった仕事に就いている人もいます。

職業によって、資格が必要だったり、大学を卒業しておかなければならないものもあります。だからこそ、今から真剣に将来の進路のことを考えなければいけないのだと思います。進路と職業、これは切っても切り離せないものです。

そんな事も含め、今まで総合的な学習の時間や、進路指導を通して思ったのは、将来の夢はまだ具体的に決まっていなくても、苦労してでも自分が夢中になれるような職業に就きたいということです。

たくさんある職業につながる進路を選ぶのはとても大変だ

と思います。でも、これも一つの自分の人生の中の出来事だから、真剣に考えていきたいし、将来の夢と並行して考えていきたいと思います。

作ることの喜び

港区立港南中学校 一年

上斗米 愛 実

私は、ものづくりの経験が浅いので、小関智弘さん著の「中学生に伝えたいものづくりの心」と「ものづくりに生きる」という本を読み、自分の経験も合わせて「作ることの喜び」について考えてみた。

小関さんは、「ものづくりの心とは、どのようにしたら人の暮らしの役に立つものをつくれるか、という目標をもった心構えのこと」であり、「人の役に立つものづくりというのは、無限の可能性を秘めている……。……その可能性を実現に向かわせるのは、ものづくりする人びとの夢とところざしである」と書いている。私は、ものづくりをする人達にはこのような目標をもった心構えがあるからこそ、私達が快適に過ごせるものをつくる事ができるのだと思った。そしてものづくりをする人達は、夢と高いところざしをもって、アイデアが豊富でたくさん経験があり努力する心をもって、から、すばらしいものをつくれたのだと思い、その前向きな姿に感動した。そして、夢とところざし、すなわちものをつくる人の情熱がそがれたものは美しく輝いていて、それ

を見た人や使う人がすばらしいと思えるものもあると思う。

小関さんの本「ものづくりに生きる」にはものづくりの心を持ったさまざまな人達のエピソードが語られている。その中で特に私が共感したのは、次の三つのエピソードである。

トヨタ自動車は「豊田自動織機」という織機のメーカーだったが、もともとの名は「豊田自動織機」だった。しかし、外国に織機を輸出するようになると、「自動」という日本語にあたる外国語がなかったので、やむを得ず「自動」に変更したそうだ。豊田佐吉は、機械とは自ら動くのではなく自ら働かなければならないと考えていたので、このことをとても残念がったそうだ。

私の今までの機械の見方とは、機械は定められた通りに動いている、ただそれだけのものだったが、この文章を読み、機械も人間と同じように働かなければならないという豊田佐吉の考えはすてきでどこか心を打たれる所があり、共感した。

ネジを作る職人で、ネジ作りが少し失敗した時に「まあいいだろう」と思う男の作ったネジと、「こんなもの納めたら恥ずかしい」と思う男の作ったネジでは、ネジの仕上がりが違う。恥だと思う男の作ったネジは美しいのだ。

私はネジ一つにも作った人の心が現れ、つくられたものと人間は異体同心になっていることを教えられた。

ものづくりの工場で働く人達は、ものをつくる時に、自分でこうしてみようと決めて、それがうまくいった時のうれしさがものづくりの楽しさだと言っている。

私も幼いころからものをつくるのが大好きだったが、その理由を今考えてみると、自分でこうしてみようと決めてそ

れがうまくいった時のうれしさがあったからだと思う。

私達の身の周りにはたくさんのものがあふれているが、そのものの一つ一つには作った人のアイデアや努力がそがれているということを忘れていたような気がする。これらの本を読んだ時、改めてそのことに気づかされた。「作ることの楽しさ、人間としての生き甲斐(がい)や働いて得た達成感があるからこそ、人は、寝食を忘れ、損得勘定を度外視しても、新しいものづくりに挑戦する。」という小関さんのこの言葉は私にとって印象深い言葉だ。

ものづくりをする人には、ものを自分の手で作りあげた時の達成感が忘れられず、新しいものづくりに挑戦するのだと思う。これからは、私も何かをつくる時にはものづくりをする人たちのことを見習い、夢と高いところさしを持ち、達成感を味わうために、アイデアと努力をしていきたいと思う。

未来の為に出来る事

大田区立大森第二中学校 三年

橋 本 彩 香

最近、テレビ等でよく昭和時代の映像や、それを舞台にしたテレビドラマが放送されているのをご存知でしょうか。ほんの数十年前の時代の時代と比べてみても、私達の生活はずいぶんと便利になりました。携帯電話で外国にいる人ともいつでも話せるし、飛行機に乗れば地球の裏側へも行け、スペースシャトルで宇宙へ行く事も出来ます。家には冷暖房器具や

テレビ、冷蔵庫といった便利な物が多くあります。スイッチを入れれば明かりが付き蛇口をひねればお湯が出る。今となっては当たり前ですが、昔の人々はこの様な暮らしを考えもしなかったでしょう。こんな便利な生活は昔の王侯貴族でも出来なかったのです。しかし、それ程の生活を送っていても、私達は何の有難みも感じていません。それどころか、私達は今この手で地球を滅ぼそうとしているのです。

私達人類は生きると同時に、「物を作る」という行為を行ってきました。その行為は、今後の人生をより良く過ごす為には必要な行為でした。しかし、人類は地球に存在する、限り有る資源を使い、とんでもない物と一緒にこの世に生み出してしまったのです。それは、いわゆる「自然破壊」や「地球温暖化」の原因であるものの類の事です。何故それらが生まれてきてしまったのか。その答えは文明にあります。

皆さんはどこかへ移動する際に、何を主として利用しますか。この質問に対して、大抵の人は「自動車」と答えると思います。では自動車は何をエネルギーとしていますか。もちろんガソリンです。数年前から電気をエネルギーとした自動車が発売されていますが、それを利用している方はまだわずかだと思えます。自動車が使うエネルギーがガソリンなら、電気製品は？もちろん電気です。では、それらのエネルギーはどういった方法で作られているでしょうか。水力発電や風力発電、そして一部の先進国では原子力発電等、様々な方法でエネルギーは作られています。最も多いとされる発電方法は、石油を燃やす火力発電です。

視点を百年ほど前にずらしてみましよう。昔、王族等の位

の高い人物は、何百、何千という数の人々を奴隷として扱い、贅沢な生活を送っていました。しかし、私達人類は「石油」という、文句を言わず、よく働き、おまけに食事の必要も無い、便利な奴隷を見つけたのです。けれど、石油にはいくつかの問題点が有ったのです。まず、石油には限りがあるという事。そして、石油を燃やすと二酸化炭素が発生するということ。そして、石油を燃やすと二酸化炭素が発生するということ。これは地球温暖化の原因とされるものです。適度な量の二酸化炭素なら植物が呼吸して酸素に変換してくれますが、最近はその植物自体が減少してきているのです。先程、石油には限りがあると言いましたが、まだ後数十年は使える量が残っています。このまま石油を使い続けて、本当に良いのでしょうか。文明社会が放出する二酸化炭素は増え続け、かたや植物は減少し続けているのです。いずれも酸素が不足し、地球上で人間が生存できなくなるのは、有り得ない事ではなくなってしまうのです。

では、それを防ぐにはどうすればいいか。答えは実に簡単です。石油を使わなければいいのです。自動車も電気も使わず、二酸化炭素の放出を限り無くゼロに近づけ、地球全体で植物を増やす努力をすれば、いつの日か世界中の空気や水が綺麗になるでしょう。確かに、すでに地球には自然には分解されないゴミや毒物が埋まっています。それらをどうするかは別問題として、これ以上汚さなければこれ以上汚くはありません。もちろん、これはものすごく大雑把な考えですが、基本の考えはここに有ると思います。しかし、石油の上で成り立っている私達の生活から石油を無くすということはつまり、「文明を捨てる」と同じ様なことです。これは予想以上

に大変なことだと思います。石油を失えば、たんに不便になるだけではありません。電気や石油を使わなければ食料の生産が減り、世界人口の何割かの人々は飢え死にしてしまうでしょう。石油を使っても使わなくても、人類には危険が迫ってきているのです。では一体、どうすればいいのでしょうか。

先程の話について考える前に、少しでもリサイクルの事にふれてみたいと思います。皆さんは、リサイクルと聞いて何を思い浮かべますか。一般にリサイクルとは、ゴミや家電製品、工業廃棄物等を再処理して利用する事を言います。しかし、これらは非常に中途半端なリサイクルです。何故なら再処理をして利用する為に、また石油エネルギーを使うからです。ゴミとして捨てるよりはましですが、これでは本当のリサイクルとは言えません。リサイクルというのは簡単そうに見えても、実はそうではないのです。そんな中、ほぼ百％リサイクル社会を実現していた国が有るのです。それは江戸時代の日本です。

江戸時代の人は誰に言われるでもなく、己の中にある儉約精神に忠実に従い、リサイクルをしていました。例えば一枚の着物。着古してヨレヨレになったら寝巻にし、さらに古くなったら赤ん坊のオムツに。洗い続けてボロボロになったら雑巾にして、どうしようもなくなれば竈^{かまど}の焚付けにする。そして残った灰は灰屋に売る。全く無駄が有りません。これをリサイクルと呼ぶに何と呼ぶでしょう。しかし、今更この時代には戻れないのです。

それではどうするか。今度は前に話した話も合わせて考えてみて下さい。私達人類は未来の為に一刻も早く新しい社会

をつくり出さなければなりません。今のままでは、人類は破滅の一途をたどってしまいます。その為に私達は、完全なリサイクル社会の確立と、石油に変わるクリーンなエネルギーを見つけなければいけません。どれ程の時間がかかるかわかりません。でもやるしかないのです。それが唯一私達が未来の為に出来る事だから。

「働く意味」とは

板橋区立赤塚第一中学校 三年

爲 谷 薫

今までに「働くこと」についてさほど考えていなかった。そもそも「働くこと」とはいったい何なのだろう。私は、「働くことの意味」は一つと限られたものではなく、たくさんのことがあると思った。人が生きていく上で、働くということはとても重要である。働くことと収入が得られる。ほとんどの人が働くことは「お金を稼ぐこと」と思っているだろう。

しかし、私は収入を得るためだけに働くわけではないと思う。その一つは、自分自身を磨くことだ。私は、二年生の時職場体験で保育園の先生を体験させてもらった。保育士の手伝いをして、たくさん学べるものがあつた。幼い子供たちは、常識にとらわれた大人たちとは違って考え方が異なり、並外れた子供たちの思いつきに驚き考えさせられることもあるだろう。子供たちの物のとらえ方を知り、もっと細やかに物事をとらえることができるのだ。こうして、働いて人と関わっ

ていくうちに自分の内面を、より磨くことができると思う。働きながらも夢に向かって自分自身を磨いていき、一生懸命生きることが出来る。夢というものは色々な環境で過ごせば過ごすほど大きくなる。働くということは、生きるためと同時に人として大切な心構えや心をも成長させることができる場だと思える。

もう一つは、働くことは自立するためのものでもあると思う。今までは、親や学校では先生などからたくさんのことを教えてもらい、人に頼って生きてきた。しかし、社会に出るということは、自分の行動はすべて自分の責任になるということだし、自分で「働く」ことを経験し、社会の大変さや大切さを勉強していくのだと思う。自立とは、厳しい社会の中で自分自身が変わって一人で生活していくようになることだ。そのためには、やっぱりお金も必要になってくる。もし将来自分の家族を持ったら、その家族みんなが幸せに過ごして行くためにもお金が必要になってくる。その大切な人のために働くということは、とても大切だし、当たり前のことだと思う。働くことは必ず意味があって誰かの役に立っている。私の母は小学校の給食を作る仕事をしている。その作った給食は小学生や先生方に食べてもらい、そして喜ばせることができる。自分が毎日している仕事で、人のためになっていることは、すごく素晴らしいことだと思う。働くことは、毎日大変だし難しいことだと思うし、辛くなることもたくさんあるけど、それを乗り越えていかなければ自分は生きていけないだろうし、働くという経験をすることは、自分にとってとても為になるということだと思う。そして、自分自身のためにあるものであり自分の将来、それを必要として

いる人のためにあるのだと感じた。

社会人になると、学生としてでは分からなかったことや、経験できなかったことも知り、精神的に強くなれる。社会に出て、今まで自分がどれだけ親や周りの人たちに頼り、甘えていたのかにも気づかされると思う。親元を離れたら、嫌でも自分一人で生活しなければいけないので、そのためにも精神的に強くなったり、一人で生きていける知識も働くことにより、身に付けることができる。つまり、働くことの意味とは、生活をするための収入を得るためというのにも働くことの意味だが、それだけでなく、精神的な面でもたくさんのことを得るためでもあるということだ。

職場体験や農業体験を通して、働くことについて考えて、人と接すことの大切さ、人間関係の大切さ、働くことの尊さを痛感した。働くことの意義や自己の職業に対する意識を高められたと思う。

私たちはいつか、必ず社会に出る日がやってくる。本当に自分が就きたい職業を見つけて、働くことが生きがいになる人になりたい。そして、働きながら自分を磨いていける、そんな人にもなりたい。この夢を実現するために今は学生の仕事とでも言える勉強を懸命に努めていきたい。

これからの「未来」を作り上げていく若者一人一人が働くことの大切さを考えて、少しでも社会の中で、社会に貢献することが大切だと思う。私も、「未来をつくる若者」の一人として就職するときがきたら、いまいちど「働くこと」について深く考えていきたい。

ありがとう

足立区立第四中学校 二年

山 ■ 沙 織

職場体験、それは私にとって、普段の学校生活では学べないことを学ぶことができた、とても良い機会であったとともに、仕事に対する考え方が大きく変わるきっかけとなりました。

働くということは、まだまだ自分にとって遠い先のことです。目指したい職場はいくつかあります。しかし、働いて賃金を得るということは、いくら自分の好きな職業であろうとも凄く大変なんだろうな、と漠然と思っていました。

五日間の職場体験は、学校へ行くのとは違ってやはりとても大変なことでした。働くことは責任がありつらいこと、という考えは今でも変わっていません。ですが、初日に職場の方に「仕事はつらく大変なことも多いけれど、その分楽しいこともたくさんあります」と言われました。仕事に楽しいこととや良いことがなかなか結びつかなかった私は、その言葉にとっても驚きました。第一日はあまり仕事をせず、体験する職場の仕事先の内容の説明を受けることが多く緊張の中で、肉体的にはなく精神的にとっても疲れました。これから四日間少し不安で楽しいことや良いことが仕事の中に潜んでいるという実感はわきませんでした。しかし、一日一日と過ぎていくうちに、何か少しずつですが自分の心の中に仕事への楽しさや、自信のようなものが芽ばえて来ることに気付きました。

例えば目標を定めそれをやりとげた時、あるいは予定よりも早く仕事が終わられた時、そして何より職場の方からの「ご苦労様」や「ありがとう」という言葉、その中に働くということは、ただ大変なことだけではなく、やりがいや満足感そして楽しさを感じることもできるものだと思います。

また、人と人とのコミュニケーションをとる為のあいさつの大切さも教えて頂きました。あいさつとは、とても簡単そうदैて実はとても難しい事なのかもしれません。元気よくあいさつされれば、それはお互いとても気持ちの良いものです。しかし面倒くさいとか、恥ずかしいとかの感情で、あいさつをしない人も少なくないと思います。自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを知る第一歩があいさつなのではないかと思いました。

職場体験の五日間を終え家族で仕事について話す機会が増えました。父の職種や会社の話を聞くのは初めてだったので両親と自分との距離が近くなった気がしました。数年後に仕事に就くとしたら、自分の趣味に関係のあるものが望ましいと考えています。しかし実際に働くのはまだまだ先のことで、すので、今一つに絞る事はできません。これからまた別のやりたいこともたくさん出てくるかもしれません。好きなことや興味のもてることを仕事にしたいという気持ちは今も変わっていませんが、この職場体験を通じ少し職業に対する考えが変化しました。「誰かに感謝してもらえ、誰かの役に立てる、そして自分が満足できる」という仕事が見つかるといいなと思います。今、そう思えるほど今回の体験の中の「ありがとう」の言葉はとても重く、暖かいものに感じられました。

た。人に感謝されるということが自分をこんなに素敵な気持ちにさせてくれるのだと初めて知り、職場の方々が辛くて大変なことがあっても、ありがとうの言葉で元気づけられ、明日もまたがんばろうという気持ちになれるのだとおっしゃられたことも今では納得できます。

この五日間は本当に短い期間でした。たった五日で何かわかるのかと思われるかもしれませんが、でも、働く人達の身近で、その人達の生の声を聞くことができるというのは、なかなか経験できるものではありません。働くことは、やりがいがあり、楽しいこと、嬉しいこともたくさん感じることが出来るものだということ、それを知ることができただけでも、私の職場体験は本当に貴重なものでした。数年後、私が何の仕事に就いているか、それは全くわかりません。趣味を生かした仕事かもしれないし、人の役に立てる仕事かもしれない。たとえば、どの仕事についても、あいさつは基本であるという事、またありがとうと言われた時のあたたかい気持ちは忘れることなくいきたいと思います。そして、人に素直に感謝できる、ありがとう、と言うことができる、そういう人になっ

ていけたらいいなと思います。職場体験で教えて頂いたことは、仕事に対する考えが少し変わっただけでなく、人として、とても大切なもの、それを改めて感じさせてくれました。感謝する気持ちを決して忘れることなく、数年後、働いていきたいと心からそう思います。

中学校の部 佳作

働くことの喜び

港区立朝日中学校 三年

清水 由 貴

来年は、高校生。もう働くことが出来る年齢です。私は、高校生になったらバイトをして、お金を貯めたいと思っています。しかし「働く」ということを、私は真剣に考えていませんでした。この作文を書くにあたって、「働く」ことについて考えました。また、体験学習などもふり返ってみました。そしたら、私にも「働く」ということが分かったような気がしました。

私が、このことを考えた時一番に思いついたのが、中学二年生の時の職場体験です。私の学校では、インターシップというのを実施していて夏休みに行われます。私はここでいろいろなことを学びました。

最初、私は働くことはとても緊張するものだと思いました。私が職場体験に行ったのは、お花屋さんでした。三日間の間お世話になりとても良かったです。私は花屋さんというのは楽な仕事のイメージがありました。しかし、そんなイメージはすぐに消えました。花屋さんというのは、体力的な仕事が多くとても大変な仕事でした。私は、この時仕事も人と同じように見かけで判断してはいけないなと思いました。花の水やりや、店内の掃除、楽しかったけど、ハードだったのを覚

えています。けれども、やはり一番苦労したのは接客でした。相手が「人」でそれも「お客」という立場だからとても緊張しました。接客では「いらっしゃいませ」と「ありがとうございました」の二つの言葉がとても重要でした。お客が来たらまず、大きな声ではっきりと「いらっしゃいませ」と言います。最初は、あまり声が出なくて上手く出来なかったけれど、やっていく内にだんだんと声が出てきました。花屋さんに来て、疑問が私にはありました。それは、花束を作る時です。花束を作る時、大体はその場で店員さんが花をすぐさま選んで、とても綺麗な花束を作ってくれます。私は、すごいと感心する反面、なぜあんなことが出来るのだろうと思っていました。しかし、ここへ来てから、この疑問は消えていきました。それは、何に対しても真剣で常にお客の気持ちになって考えているからです。

私は、このインターンシップで学んだことは、二つあります。それは、働くことの大変さ、真剣さです。「働く」ということは、人と係わることです。だからこそ、真剣にやらなくては、ならないのです。

私の家では、帽子屋を営んでいます。やっているのは祖父で、近くの小学校の校帽を売っています。この校帽は、すべて祖父の手作りです。とても丁寧に作られています。はっきり言ってしまえば私の家は、とっても古いのです。しかし、古いなりに頑張って経営しています。小学生の時、私は友達にこんなことを言われたことがありました。

「おじいちゃんって帽子作ってるんだよね？すごいなあ」と、私は堂々と誇らしげに

「うん」

と答えました。私は、祖父が帽子を作るということを誇りに思っています。しかし、祖父も高齢なので、全一人で行う訳ではありません。祖母が手伝うのです。この帽子は、決まって祖父が形を作り、祖母が出ている糸などの処理をします。私は、二人が協力してやっと帽子が出来るのだと思いました。そう思ったらこの帽子がとても輝いて見えました。

いったんこの帽子がどうして働いているの？」

「おばあちゃんはどうして働いているの？」

「お客さんの笑顔が見れるからだよ。お客さんが満足してくれると、こっちまで満足して喜べるからだよ」

と言っていました。小さい頃の私には、よく分からなかったけれど今なら分かるような気がしました。働くことの意義、それは喜びがあるからです。人を喜ばせる仕事とはすごいものだと思いました。

私は「働く」というのは案外簡単なことだと思っていました。「高校生になったらバイトが出来る」と気軽に考えていました。しかし、やってみると大変で、とても大切なことなのだと思います。私も、いつかは大人になって働く時が来ます。自分の仕事を持ち、一人で暮らしているかもしれない。しかし、今は、まだ自分が何になっているかなんて、分かりません。もしかしたら、今の夢と全然違っているかもしれません。それでも、私は今、中学三年という立場で将来のことも考えなければ、なりません。けれども、だからこそ、今「自分が出来ること」を見つけ自分の将来につながることを

をしたいです。そして、いつか大人になった時、職場体験の経験を生かし、祖母が教えてくれた「働くことの喜び」が分かる様になりたいです。

働くことの意義

港区立朝日中学校 三年

増 田 芙 美

私の父はよく、「早く仕事を辞めたい。」と言う。

労働とは、そんなに辛いものなのだろうか。答えは「YES」だろう。駅に勤めている父は、一日何時間も仕事に励めば、当然心身ともに疲れると言う。対処に困る客もいるのだろうから、労働は楽しい事ばかりではないだろう。

しかし、「働く」という行為は、人間にとって必要不可欠なものだと思う。

たとえば、「ニート」と呼ばれる人々がいる。社会で働く人たちは、彼らに良い顔はしない。国としても、増え続けるニートの存在は社会問題として取り上げられている。

私思うに、「働く」という行為は、人間がひとりの大人として認めて貰うためのステイタスなのではないだろうか。懸命に仕事をし、それに見合った収入と地位を確立する。それこそが、社会で評価される点であるように思う。

しかし、その一方で、仕事においては、「収入や地位よりも、好きなことを仕事にしたい」という人々もいる。絵が好きだから画家になる。有名になれなくても良い。そんな

考え方だ。

この二つのパターンは、一見全く異なったもののようにも見える。だが、私は全く違うとは思わない。どちらも、「充実感を求める」という点で結ばれていると思うからだ。

つまり、好きな仕事とは言えなくても、「収入や地位」を確立して充実感を得るか、収入や地位を捨てても、「好きな仕事ができる」充実感を味わうか。結局の所、労働者は「充実感」を求めているのだと思う。すぐに仕事を辞めたいと思うのは、もしかしたら自分の働きに見合った充実感を感じることができていないからなのかも知れない。

私がこう考えるのは、去年の夏に「インターシップ」を三日間体験しているからである。朝九時から夕方五時までの労働体験は、確かに疲れるものだった。しかし最終日、お世話になった幼稚園の園児から、「私、お姉ちゃんの事を絶対忘れないよ。」と手を握られた時、疲労感よりも喜びが勝った。自分の働きを認めてもらえた。そんな充実感を得ることが出来たのだ。

ところで、「幸せになる五つの心得」という物をご存知だろうか。私が夏季学園で発見し、気に入ったためにノートに書き写した物がある。今日読み返してみたところ、働くことについての項目もあった。「させていただきます。という奉仕のこころ」である。

「させていただきます」。今の若者は、面倒なことを嫌う傾向がある。私もそのひとりではあるが、人間という生物は他者の協力なしには生きられないと誰もが理解しているのだ。このことばは、相手にすすんで歩み寄り、協力や奉仕をする

ことは、自分のためになることなのだと説いているのではないだろうか。そして皆がそれを肯定し、実行したならば、皆がみんな確かな「充実感」を得ることはそう難しくはないだろう。

よく、将来の夢を問われる。その度に中学生になった私は「まだわからない」と答える。だが、幼い頃はとうとうただろう。時にはケーキ屋さん、時にはお花屋さんになりたいと、大人から見れば突拍子もないような物ばかりだった。幼い子供は、純粹に「憧れ」を夢にするのだ。けれど、その憧れはどこからきているのだろう。簡単なことだ。「大人」である。

「大人」、つまり「労働者」だ。幼い子どもに、そして私たちに夢を与えてくれるのは、他でもない労働者の方々なのだ。だからこそ、私は「労働」という行為を「辛いこと」と答えたくはない。答えるとすれば、「労働者に充実感を与え、そして子どもたちに夢を抱かせてくれる行為」だと答えたい。私が夢を与える立場になるまでには、後何年もある。だが、決して遠い未来ではないだろう。中学校三年生のこの時期に「働くこと」について改めて深く考えることができたのは大きな収穫となった。この思いや考え方を忘れずに、来たるべき時には子どもに夢を与えられる、そんな大人になりたいと思う。

手づくりの大切さ

新宿区立牛込第二中学校 三年

小 川 舞 香

私は小学校・中学校と技術や家庭科などの授業の中で様々な物を作ってきました。私は作業が遅く、なかなかできあがらないことにイラつき、飽きてしまって、仕上げの部分が適当になってしまうという悪い癖がありました。その作業をしている内に今している作業なんか機械でやってしまえば簡単なのにと考えてしまい、手作業に文句ばかりを言っていました。しかしそんな考えが変わる機会がありました。

それは三年生で行った修学旅行でのことでした。私達は班の自由行動の時間に京都の文化の体験教室に行くことになり、漆器に絵を描くという体験をしました。そこには何百年と続いている京都の文化がまだ息づいていて、驚き、そして少し感動したのを覚えています。その作業場に着いて、少し説明を受けてから私達は作業を始めました。もちろん初めての作業だったので、作業の際気をつけなければならないことを教わりました。それは絵を描く筆はしっかりと洗わなければ、化学反応を起こして、漆器がヒビ割れてしまうらしいのです。それを聞いてから絵を描き始めた私達は順調に完成へを近づいていました。しかしその途中私は失敗をしてしまいました。注意も受け、自分でも気をつけていたつもりの化学反応を起こさせてしまったのです。私はこの時、手作業の難しさ・大変さを身にしみて感じました。なんとなく言われた通りにし

ていれば普通に完成させることができるだろうとタカをくくっていた私にとって、そのことは結構ショックなものでした。それでも、その後教えてくださった作業場の人達のおかげでヒビがあまり目立たないぐらいにまで、修復することができました。私はその技に驚きそして感動しました。その修復の速さも技術にも長年の鍛錬がにじみ出ているなと思いました。私はこの時多分初めて日本の文化というものはすごいと気づきました。それまで私は日本の文化なんて古くさくて、ダサいものだと考えていたので、京都での体験はとても強い衝撃がありました。

現代の日本は様々なジャンルで進歩を遂げています。世界の中でもトップレベルの技術力も持っています。しかし、その代わりに日本独特の伝統的な産業が減りつつあるのが今の日本です。全ての部品を機械で作っている今の産業とは違い、伝統的産業は長い間修業をした人しか、商品として作り上げることはできないし、機械で作るよりどうしてもコストが高くなってしまうため、値段も高くなってしまうと思います。そのため、買っていく人も減ってきているという現状があります。そしてその現状をさらに悪化させているのが、技術を受け継いでいく人達がいらないということです。今、工芸品などを作っている人達はみな長年作り続けてきているというベテランで、年齢が高い方々が多いのです。しかし、その方々に伝統的な技術を学ぼうという若い後継者がなかなか現れてくれません。このままでは日本の文化はどんどん失われていってしまいます。

物を作る時に感じる喜びというものは、実際自分達がやっ

てみなければ分からないものです。しかし、身近な所でそれを教えてくれる所はなかなかありません。だから、私達は学校で物を作っている時の喜び、楽しさを学んでいるのだと思います。けれど、私達の年代の子供達はこのようなことに対してまるで興味がありません。では、どうやって興味を持たせればいいのでしょうか。それは、やっぱり学校の授業の中にあると思います。たとえばどんなに小さなものでも、“手づくり”というものを味わうことができるからです、だからせめて学校で、エプロンや巾着、本棚などを作る時ぐらいいは真剣に取り組んで、手作業で物を作るということがどれだけ難しく、大変なことなのかを私達は体で感じるべきなのではないでしょうか。

私は家の中で家事というものを手伝ってきていなかったのですが、ミシンを使ったことさえありませんでした。せっかく修学旅行でとても貴重な体験をしてきたのに、このままではいけません。だから、私はその経験を生かしてこれからの技術や家庭科の「手づくり」のものを作るように心がけたいと思います。例えば、一度説明があったからといって、必ず自分がその通りに作業しているとは限りません。聞いた方法と少しずれているやり方を勝手に考えてしまっているかもしれない、なかったり、初歩的なミスをしてしまったりしているかもしれないからです。ミスを失くすようにするためには、もう一度教えてくれている人に確認し、さらに自分自身も何回も見ることが大切だと思います。他にもある経験から学んだ知識を一つにして、一つの作品を作ることが私の今後の目標です。

このように私はこんなささいな事しかすることはできません。でもそんな小さなものでも「手づくり」のものというのは、何か深いあたたかみがあると思います。今の世の中の機械で作られた冷たい物で囲まれて、生活を続けている現代人にとって、昔の人達から受け継がれてきた「手づくり」の物から感じるあたたかみは、とても大切なものではないでしょうか。

自分の将来に向けて

新宿区立牛込第二中学校 三年

神 馬 夏 紀

「大人になったらどんな職業につこう」、「どんな職業が自分に合っているのだろう」。私がそのようなことを、身近な問題として考え始めるようになったのは、つい最近のことです。私が中学校に入学するまでは、職業についてとか、自分の将来についてというのを、具体的に考えてみたことはほとんどありませんでした。ただ時々、「あの仕事はおもしろそうだな。カッコいい仕事だな」と、その時々になんか興味をもつくらいで、自分の「将来の職業として」という意識は全くありませんでした。

ところが、中学校に入学して以来、私の意識はどんどん変わってきています。学校での総合的な学習の時間で、職業について学ぶ機会がとて多くなりました。また、仕事と密接に結びつくことを学ぶ時間もとて多くなりました。そして、

家庭でもいろいろな職業について両親と話す機会が増えたのです。実は、私はとても身近な父親の職業についてすら恥ずかしいくらい知らなくて、ほとんど理解もしていません。ということに気づかされました。またそれだけではなく、私は先日「十三歳のハローワーク」という本を読みました。今までに見たことや聞いたことのない職業がたくさんあったことに、とてもびっくりしました。普段の生活では意識したことのない職業が多く、私が今まで認識していた職業は、社会の活動の中のほんの一部にすぎませんでした。さまざまな職業が、いろいろな形で支え合い関わり合いながら、私達の日常生活が成り立っているのだということを知ることができて、とても興味もてる本でした。また、中一の時には職場見学に行き、中二では実際に仕事をしてみて体験するという学習がありました。私は、中一の時には牛込警察署の見学に行き、中二では吹奏楽部の私にとって、とても興味深く思っていた東京都交響楽団で職場体験をしました。どちらも初めての職場で、新しく「職業」としてとても意識が強くなりました。さらに、学年で他の班の人達がそれぞれの職場で体験して学んできたことをまとめたレポートの発表を聞きながら、みんなで勉強をしていきました。今まで自分が知らなかったことを、友達の具体的な体験談を通して知ることができて、本当に興味深い学習だったと思っています。

また、最近では、漠然とではありますが大学についても友達や家族と話すようになりました。「この大学にはこんな学部があって、こんなことが学べるんだ」とか「こういう職業につくには、こういう大学に入ってこんなルートで進んでい

くんだ」などという、具体的な細かい点にも関心が持てるようになってきています。そして最近では、自分が興味を持てる職業もいくつかに選ばれてきたように思います。今までの私の意識の中での職業とは、漠然と生活を成り立たせるためのお金を得る手段だという感覚だったように思います。しかし、いろいろな学習を積み重ねていくうちに「自分の将来の生きがいになるような職業につきたい」という意識が芽生えてきました。とても意欲がわいてくるようになりました。

私は、弟が病気を抱えていて小さいころから手術をくり返していたりして、病院に行く機会もあったせいかな、このごろは医療に関してもとても興味を持てることに気がつきました。人の命の助けとなるこの職業も、生きがいを持てる職業のひとつだと思えます。現在では、医療に関わる仕事に従事して、その仕事を通して、社会に貢献できたら—という思いが強くなります。そのためには、今の私にできることは、すべての職業にも通じる基礎となる中学の勉強を、しっかりとしていくことなのかなと思っています。高校入試がひかえているため、受験に向けて今は私自身必死に勉強している状態です。自分の目指している高校に入りたいためなのも事実ですが、よく考えてみると、それは目の前にある「高校に合格する」ということがゴールではないのです。自分の将来をより良いものにするために、そして自分の夢をかなえるための通過点なのだと思います。そのためには、これから勉強ももちろんのこと、人間としてもたくさんのかんことを学んでいかなくてはならないはずです。将来、この職業に就いて本当によかったと思えて、生きがいを持って仕事をするためにも、自

分がその時々でするべきことに全力を注いでいこうと思っています。

職場体験を通して学んだこと

新宿区立牛込第二中学校 三年

森 内 咲 恵

私は、二年生の時に総合の授業で、東京都交響楽団の方に職場体験をさせて頂いた。吹奏楽部に入って活動している私にとってはとても魅力的なことだった。私は初め、東京都交響楽団の方々の下で短い時間でも一緒に仕事が出来ることが嬉しくて仕方が無かった。なぜなら、楽団の方々の演奏を聴かせて頂いたり、音楽家という職業のことについて知ることが出来るのではないかと考えたからだ。しかし私が実際にやらせて頂いた内容は演奏のことでも、楽器のことでも、音楽家という職業のことでも無く楽団を裏で支える事務のような仕事だった。私がやりたかった仕事内容では無かったが、楽団を支えるということに強い関心を持った。

まず、私は楽譜の書き込みを消す作業と楽譜に和紙の補強テープをはることからやらせて頂いた。私が所属している吹奏楽部では指導して頂く指揮者が練習の度に変わることはまず無い。それは他の学校の部活でも同じだと思う。だがこのような楽団では練習の度に指揮者が変わる。指揮者が見るスコア譜は一つしか無いため書き込みを消さなければならない。次回の練習の時の指揮者の方の参考になるのだから消さなく

でも良いのではないかと考えたが、楽譜の書き込みを消すことは次の指揮者の方に楽譜を気持ちよく使って頂きたい、という思いやりの気持ちの表れなのだと分かった。また、楽譜に補強テープをはることも毎日使う楽譜がすぐにボロボロにならないようにという思いが表れていた。

次に行った作業は封筒に切手をはる作業と、領収書にはんこを押す作業だった。この封筒は、東京都交響楽団の演奏会のチケットを入れる物でダンボール箱の中に何百枚も入っていた。これだけの数の封筒に多量の切手をはることは、とても面倒だし大変なことだと思う。しかし東京都交響楽団の演奏をぜひ聴きたいという人達が、何人もいるということだ。演奏を聴くことを心待ちにしている人達のことを思い浮かべると頑張ることが出来るのではないかと思った。演奏を聴く人達は単なるお客様では無く、もしかしたら楽団の方々に一番力を与えている存在なのではないだろうか。そしてお客様に感動する演奏を届けられるのは地道な作業でも毎日楽団のために頑張っている人達がいるからだと思う。

これらの経験を通して、私は演奏している人のように大きなホールで演奏して、お客様から拍手をもらうことと、裏で楽団の演奏会のために一生懸命支えて演奏会を成功させることは結局同じことなのではないかと思う。違うのはお客様の前に立っているか、見えないところで立っているのかだけだ。このようなことを言えるのは、この職場体験で演奏する側を体験したのではなく、裏で支える側を体験することが出来たからだと思う。私にとってオーケストラで演奏することは憧れることでもあるが、支えていくことも悪いことではないな、

と感じるようになった。

ところで、支えるということは、私が所属している吹奏楽部内でも言えると思う。私の担当している楽器は、曲の中で主旋律をいつも奏でている楽器では決していない。どちらかというと主旋律の裏で伴奏部分を奏でている。一つの曲を上手く演奏するには、練習の度にどうすれば美しいハーモニーを作ることが出来るのか、というのが一番重要になる。主旋律が大きすぎて、その他のパートの音を消してしまったりは良いハーモニーは作れないし、かといって伴奏が主旋律パートより前に出て来て音を出してもハーモニーは作れない。とても難しいことだが、ただ単に、吹ければ良いということではないようだ。こういった事から考えると、私達は互いに良い音を作り、素晴らしい演奏をするために支えあっているのではないかと思う。支えることは一見とても良いことをしなければならぬように感じるが、もしかしたら私達は日々生活していく中で誰かを助け、支えているのかもしれない。

また、私は昨年の合唱コンクールでの伴奏という仕事でも支える事の大切さを学んだ。私は伴奏という役職を引き受けたくなかった。理由は単純で、本番で失敗して恥をかきたくなかったからだ。オーディションを行って選ばれた時に、自分より適任の人がたくさんいるはずなのにどうしてだろう、と疑問に思っていた。どうしても納得がいかなかった私は、先生に、なぜ私なのかと聞いてみた。答えはあなたの伴奏が一番歌いやすかったからだ、だった。私はその時に伴奏でも歌いやすい、歌いにくいがあるのだと分かった。その瞬間、私の下手なピアノでもクラスを支えることが出来るのか、と

嬉しくなった。私の伴奏にクラス全員の声に乗って聴いている人達の方へ流れていくことがとても喜ばしく感じられた。だから毎日一生懸命練習に励んだ。ピアノに触れていない日は一日も無かったと思う。この時、私は職場体験での人を支えることの大切さを思い出していた。

この職場体験で一番学んだことは、何度か出て来ている、人を支えることの大切さだ。支えることは、今過ごしている中学生活でも重要なことだと自分の体験を通して分かった。合唱コンクールのは前にも述べたが、他にも運動会を成功させるためにお互いに助け合って、一つのことを成しとげたり、元気の無い友達を励ますことも人を支えているといえることだ。大きなことで人を支えるのは難しいと思う。しかし、小さなことなら誰にでも出来る。大切なのは思いやりが込められているか、いないかだ。私はこの職場体験で当たり前のようで一番大切なことを学び得た気がする。

仕事とは何か

新宿区立牛込第二中学校 三年

山 本 明 希

私は中学二年生のときに、学校の職場体験で東京都交響楽団に行きました。その時、私の中で仕事に対する考え方が大きく変わったような気がします。

私は東京都交響楽団で大きく分けて二つの仕事を実際に体験させてもらいました。一つ目に、封筒のひとつひとつに切

手を貼っていくという仕事です。私は普段手紙を書こうとしてもせいぜい一度に一〜二通ほどしか送りません。だからはじめ見たときは切手や封筒の多さに驚きました。この封筒というのは、前に東京都交響楽団の演奏を聴いた大事なお客様宛のものです、なるべくきれいに作業をするということを意識しました。そして私たちがすべての切手を貼り終えるのに時間がかかりました。しかし、東京都交響楽団で働く人たちが、この仕事を一人で行うとなると大変だと思いました。

そして二つ目に楽譜整理です。楽譜整理とは、例えば楽譜に書かれた小節の数を数え小節番号を打っていくという作業や、次の指揮者のために前の指揮者の楽譜への書き込みを消すというような作業です。一ページ終わっても、楽譜がめくってめくってでも終わらず、永遠に同じ作業を繰り返しているという感じがしました。集中力のいる地道な仕事だと思いました。仕事をおこなってみて、とてもやりがいのある仕事だと感じました。どちらの仕事も目立たない、いわば「影の仕事」ですが、おこなわなければならない仕事であって、この作業をしたからこそ、今があるというような重要な仕事なのです。私たち一般の人たちの目には、演奏者しか映らないけれども、陰でしっかりと支えている人がいるからこそ、今の東京都交響楽団はあり、きれいな音が私たちの耳に届くのだと改めて感じました。コンサートへ足を運べば、音楽を聴くことができますのは当たり前なことでは決していないことも分かりました。「縁の下の力持ち」とは、まさにこのことなのだと感じました。しかし、東京都交響楽団の方々、こんなに大変で地道な陰の仕事をおこなっているのか疑問に思いました。

東京都交響楽団の方々の話によると、ここで働く大半の人は、何かしら楽器を吹いたことがあるという経験者です。だから大好きな音楽に関係のあるお仕事をしたいということで、東京都交響楽団で働いているそうです。自分の好きなことを生かした仕事ができるということは、良いことだと思います。私は、仕事というものを少しあまく考えてしまっていたのかもしれませんが。今まで仕事とは、汗水流して働いてその分だけ給料としてお金をもらおうとしか考えていませんでした。だから仕事というものは、目的もなくただお金をもらおうためだけにがんばって働くぐらいとは思っていなかったのです。しかし、今回の職場体験で、ただ楽しければいいというわけにはいかないことにも気がつきました。仕事は自分のためだけでなく、会社全体のためにもしっかりと働かなければなりません。適当にやってもいい仕事は一つもなく、責任のいることだということによってようやく気がつきました。

最近、定職に就かず、アルバイトによって収入を得るフリーターや、学校にも行かないけれども働いてもない、職業訓練にも参加していない若者であるニートが年々増えているそうです。仕事とは何のためにあるのか、また仕事はなぜおこなわなければならないのか、その人たちには仕事をするという本来の意味が分からないから、フリーターやニートとなっているのではないかと思います。確かに、仕事にも何も縛られずに、ただ遊んでいることは自由で楽しいかも知れません。しかし、自分で稼ぐことができないのに、人のお金に頼って遊び放題でいるのはおかしいと思います。また、今の仕事がつかなかったり、給料が安かったりというような単純な理由で、

すぐに仕事を辞めて、次の仕事を探すというのめけじめがないし、お金のために働いていると思います。仕事を転々としている人は、その場、その場では働いても働いたつもりになっているだけで、本当の働くとは違うのではないかと思います。仕事は遊びではないので、生半可な気持ちでやってはいけません。と思います。

私の将来の夢は、まだはっきりとは決まっていません。しかし、もし就くとしたら、自分の好きなことを生かした仕事を選びたいです。なぜなら、まず飽きるということがありません。また自分の納得の行くまでとことん働くことができるので、自分の仕事に対して誇りが持てると思います。そして、その仕事をもっと好きになれると思うからです。私が社会人になる前に、自分でやってみたいと思う仕事をいち早く見つけることができると良いと思います。そして、その夢や目標を見失わずに、またその夢に少しでも近づけられるように、一生懸命勉強をしていきたいと思っています。本当の働くことの意味を分かった今だからこそ、やらなければならないことに挑戦していけると良いと思います。

将来の夢・仕事

品川区立小中一貫校日野学園 七年

濱 寫 大 輔

僕は、写真家になりたいという夢があります。小学校四年生の頃、父から一台のカメラをもらったのがきっかけでした。

ちょうど春休みで、僕は母の実家から犬山城まで連れていってもらい、庭や城の周りの山、城から見た空など沢山の写真を撮りました。その写真を見ているうちに、この空や景色はもう二度と見られないかもしれないと思い、少しさびしい気持ちになりました。

僕は小説や歴史の本も好きでよく読みますが、くりかえし読んでいても頭の中にイメージとして浮かんでくる風景は、毎回変わる事なく同じ風景が浮かんで来ます。そういう頭の中に浮かぶイメージは、想像であっても僕の記憶の中からでてくるものだと思います。

写真は、僕にまだ行った事のない所、見た事のないものを見せてくれて本を読んでいる時も知らないものを映し出してくれているような気がします。もちろん、写真を見てがっかりする事もありますが、ほとんどはこの景色をこの目で見てみたいとワクワクするものばかりです。将来、僕の撮った写真を見て、誰かがワクワクしてくれたらと思います。

写真が好きだから写真家というのもとても単純なようですが、僕が写真家を目指すと思った理由は、好きなことなら頑張れると思ったからです。僕はそれ以上の理由はないと思っています。それに何か目標があれば、それに向かって進んでいけるように好きなことなら少し辛く、困難でも努力できる気がします。勉強があまり好きではない僕は、目標もなく大人になるのは不安です。好きなことを目標にすることで、努力を重ねる事もできるし、自分の力も伸ばしていけると思うのです。

この間、新聞でニートとフリーターについての記事が載っ

ていました。そこには、ニートというのは、仕事探しをすることもやめてしまった若者達のことだと書かれていました。フリーターではあるけれど、仕事をしていたり探していたりするフリーターとは意識も心も違うそうです。

もし、好きなこと、やりたいことが大人になるまでに見つかっていれば、随分違っていたかもしれません。何になるか、何を目指すかは探しても見つかりません。もしかしたら、偶然学校で勉強したことがきっかけでやりたいことができるかもしれないし、新聞やテレビで見たり聴いたりして、興味が湧いてくるということもあるかもしれません。そんなことから将来の夢や自分の仕事が見つかるのではないかと思います。

どんなきっかけでも、自分がやりたいと思うことを見つけることは、大きな力になるような気がします。だから、今僕が写真に興味があり写真家になりたいと思い始めたのも、自分を伸ばすためにとてもラッキーだと思えます。

カメラは光の加減やしぼりの入れ方、やきつけなどの技術の面でも、構図のような感覚の面でも、そして美しい場面に出会うといったチャンスの面でも、沢山の勉強をしなければいけないと知りました。つまり、僕があまり好きではない勉強をしなければならぬということです。もしこの夢がなければ、これから勉強していくなかで僕は楽な方、楽な方を選び続けて、もしかしたらやりたい事を見つけるチャンスを見逃していたかもしれません。あの時、父からカメラをもらってなければ、写真を見てもワクワクしなかったかも知れませんでした。

でも今の僕にはなりたいものがあります。写真家というハ

ドルは、とても高いものかもしれません。でも目標は今の自分にはできないくらい高い目標にしたいのです。何故なら今できないことでも、それを目指して大きくなっていけると思うからです。

空の色が変わり続けて、山が季節ごとに表情を変え続けるなら、僕はカメラを持っていきいきと仕事に取り組める気がします。いつか僕の撮った写真を見て、皆がそれぞれ何かを感じてくれるような、そんな写真家にぜひなりたいたいと思っています。

私の職業観

目黒区立第三中学校 二年

鈴木 真里亜

『私はキャビンアテンダントになる。』

幼少の頃から感じていたことですが、いまだに、どの職業につけばよいのか分かりません。そんな時に、学校で職場体験学習が行われることになりました。私は、空港関係のサービス業、特にキャビンアテンダントに近い職場を探しました。体験学習の一覧に『羽田空港』という選択肢はありませんでしたが、第一希望に入れてみることにしました。

何週間か経過して、先生から羽田空港が職場体験学習を引き受けて下さるという報告を受けました。

職場体験学習当日、精一杯学んでしようと決心しました。当日の予定は、羽田空港内の見学、ラウンジでの仕事、コン

シェルジュと一緒にご案内業務の三つでした。空港内の見学では、航空会社の窓口がそれぞれ分かりやすく、国内や海外のショップがあるため、初めて来日した外国のお客様でも気軽に利用出来る工夫を学びました。また、お客様がくつろげるラウンジが数カ所設置されています。更に、多くの案内窓口があり、自由に動き回れるコンシェルジュ係りをそのサポートとしておいていました。

ラウンジでの仕事では、私は、直接お客様と接することはできないので、ドリンクの追加をしたり、コップを洗ったりする裏方を体験しました。裏は狭く、必要最低限のスペースしかなく、お客様が使われたコップ、スプーン、台拭きを洗う人が一人いて休む暇もなくずっと洗っていました。私は、洗い終わった物を布巾でふきました。終わったと思うと、また汚れ物が届きます。それから、洗ったグラスやカップをお客様が使いやすいように並べます。カップは、お互いに当たってもそれほど音はしませんが、グラスは、とても響きます。

私は出来るだけ、当てないように静かに設置したが、あやまって音を出してしまい、自分を責めてしまいました。ラウンジでくつろいでいる方がいらっしゃる裏には、苦勞している人がいること、一人のミスは全体に迷惑がかかることを感じました。

受付では、お客様に挨拶をしました。私は、比較的人前で、はっきり言えるほうだと思っていましたが、なぜか「いらっしゃいませ」、「ありがとうございます」という言葉が自然にでてきません。

私は、ラウンジで、グラスを当ててしまったことを思い出

して、しっかりしなければと思い直し、少しずつきちんと言えるようになりました。

コンシェルジュ業務は、スタッフの人と一緒にお客様へのご案内をしました。この仕事が一番学ぶことが多かったと思います。仕事内容は、挨拶とご案内の二つです。羽田空港には、第一旅客ターミナルと第二旅客ターミナルがあるので、どちらも体験させていただきました。第二旅客ターミナルでは、コンシェルジュの方と一緒にお客様に挨拶をしましたが挨拶ひとつでも、相手が挨拶を返してくれなければ聞こえなかったのだと思います。注意され、挨拶の姿勢や手の位置など細かい指導を受けました。挨拶をしていると、お客様に場所を聞かれますが、事前に「分からないことは、分からないままにしないこと」と聞いていたので、できるだけ丁寧な言葉遣いで「あちらにいらっしゃるコンシェルジュの方にお聞き頂けますか」とお客様にお伝えしました。そのお客様は、いやな顔をしなかったので大丈夫だと思いましたが、コンシェルジュの方に『お客様を動かすのではなく、自分が動きやすい』と更に注意されました。

第一旅客ターミナルでは、『お声かけ』をしました。案内板の前にお客様や、地図を見ているお客様にお声かけをします。勇気を出してお声かけをしても、ほとんど断られました。コンシェルジュの方にも十回中七、八回は断られるのが通常だと言われました。それでも二、三回はあきらめないでお声かけをしなければならぬことも教わりました。体験が終了する前に、帰り方を忘れてしまったおばあさんを案内するコンシェルジュをみて、自分の分からないことでも質問

に答えようとする努力がすごいと思いました。

今回の職場体験で仕事は、人の役に立ちながら自分が学ぶことではないかと感じました。

私の職業観は、学生生活の発展したものです。職場では、クラスなどはありませんが、一つのまとまりがあり、先輩後輩がいてお互いに協力しあわなければなりません。しかし、学校より自由に常識を大きくはずれることがなければ、自分の意見をみんなに聞いてもらえ、積極的に行動できる場だと想像します。でもそれと引き換えに、危険も自己責任もありますので、慎重さも必要だと思います。

作ることの喜び

目黒区立第十一中学校 三年

川 野 貴 大

私が作ることの喜びを得たのは、中学一年の時まで通っていた発明教室だった。私は、そこに小学校三年から通い始めていた。そこでは、作るもののアイデアを自分でひねりだし、設計図を作り、それを基に自分の手で実際に作品を完成させる。そして一年の終わりに審査があり、特に良い作品は十人の審査員と百五十人の生徒の前で表彰される。私は小学校の四年間は、何かを作ることはできても、完成度が高いものとは言えず、またアイデアも奇抜ではなかったため、良いものを作れたとは思えなかった。

しかしながら、中学一年の時、今年で最後なのだから頑張

ろうと思う、これまでどうしてもうまく作れなかったのかを自分なりに考えてみた。

原因を見つけることに苦労はしなかった。なぜならあまりにも理由が明確であるからだ。アイデアを考えつくまでの時間とその後の技術作業の時間配分に原因があった。年間の授業回数が限られている中で、アイデアを考えることに時間をかけすぎてしまうと、技術作業時間が短くなってしまい、改良もできず、完成度の高い作品ができなくなってしまった。だからと言って、アイデアを練ることを簡略化してしまうと、その後の技術作業が難になり、設計図通りに動かず、後々、何度も何度も、改良しているうちに時間切れになってしまう。どうしたら、この状況を変えられるのか。やはりこれまでと同じことをしていてもうまくいかないと思った。しかしながら、他のすばらしい方法はなかなか見当らなかった。数日間考えているうちに、ふと、こんな事が頭に浮かんだ。この教室は五月から開講するが、そのときに作るもののアイデアを練るのではなく、二ヶ月前の三月からアイデアを練ってみよう。

そうこうしているうちに、開講日にはすでに作るものを決めていた。

今回はルーレットを作るぞ。

スタートは順調にいった。しかし、作っているうちにうまくいかない所が出てきた。それは「強度」であった。木の板に、九十度の角度で、また木の板を取り付けるのであるが、木の板が厚く、たいていのネジは届かないか、あるいはゆるくなってしまいう状況だった。

何か良い方法はないだろうか、四年間の作業体験を思い浮かべながら、ゆっくりと頭をひねってみた。そして思いついたのが、横から木をとめる方法だった。今なら容易に思いつくことであったが、当時の私には難しかった。そして、考えを変えることで十分に安定して止めることができた。今にして思えば、このことに気づいたことが良い作品への第一歩だったようだ。

その後なんとか「ルーレット」作りに励んでいたが、カラ回りしてしまうことが何度もあり決して順調には行かなかった。しかしながら、その都度いろいろな角度から考え、やりかたを変えていくことにより、少しずつ慣れてきて、作業が最初の頃とは違い、少し前に進むようになってきた。

最後に、もうひとつ悩んだことがある。それは、「ルーレット」の数だ。一応 三個作ったのだが、このままでは、面白くなく、普通の作品になってしまうと思い、いろいろ考えた。

ふと、アイデアが浮かんだ。三個並べるのではなく、二個にしてしまう事だ。そして、審査員に何か目のような印象を持たせるため、外装を作りかぶせる事だった。たまたま、三個目の「ルーレット」の回転の調子が悪かったので、ちょうど良いと思った。結果的に、「ロボット」の目のようにして何とか完成させた。

そのとき、これまでの苦労、努力は無駄にならなかったと思ひ、感動した。そして、とても嬉しかった。

いままで、プラモデルなどを作った事はあったが、そのときの感動とは全く違っていた。今回の作品は、長い年月を経ての集大成とも言えたからだ。

この体験で私は、「作ることの喜び」を得ることができた。これはできた作品そのものではなく、その試行錯誤の過程から生まれてきていると思った。

振り返ると、今日、世の中には、数多くの物が存在している。ひとつひとつは何気ないが、じっくり思いをめぐらせて見ると、私はその裏に隠れた「作者の試行錯誤の過程」をどうしても想像せざるを得ない。

喜びの瞬間

大田区立大森第七中学校 二年

小 宮 里 穂

「私は将来、仕事をしていて、喜びを感じられる職業に就きたい」、そう思っています。

私がそう思い始めたきっかけになったのは、七月に実施した職場体験学習でした。職場体験が終わったときには、三日間やり通した達成感と貴重な体験ができた嬉しさでいっぱいでした。それとともに、喜びを得られるような職業に就きたいと思ったのです。

私が行った職場体験先は、学区域にあるお花屋さんでした。様々な体験の中で一番印象に残っているのは、生花を販売したことだけではなく、お花を使ってブーケなどを製作したことです。ブーケ作りは、いきなり一日目に経験しました。生まれて初めてのことで、しかもお店の売り物にするものだったので、かなり緊張して作りました。きれいに作るのとは、と

ても難しかったです。きれいに作るだけではなく、花のボリュームや色合いなどを考えて作るのも大変でした。ようやく作業に慣れて、完成したブーケをお店に並べました。すると、あるお客様が今作ったばかりのブーケを買ってくださったのです。まさか。一瞬、信じられませんでした。びっくりしたと同時に、本当にとても嬉しかったです。思わず、「ありがとうございます」と一言が出てきました。私はこの時、「喜びの瞬間」を味わったのです。この「喜び」は、今まで味わったことのあるものとはまた別の、経験したことのない大きな「喜び」でした。このことは、今でも忘れられません。

私が体験したのは三日間だけでしたが、同じ仕事を毎日ずっと続けていくのは、私の想像よりもっと多くの苦労があつて大変だと思います。たとえ、つらいことがあっても、その中に「喜び」や「楽しさ」があればつらいと思う気持ちも少しは和らぐと思うし、「喜び」や「楽しさ」があるからこそ、ずっと同じ仕事を続けていけるのではないかと思います。私が将来、「仕事をしていて、喜びを感じられる職業に就きたい」と思う理由がここにあります。

職場体験で学んだことは、ほかにもあります。それは、接客です。お客様に対する態度や言葉遣いなど、失礼のないように気を付けなければいけないことをたくさん教えていただきました。この、人と接する態度や言葉遣いは、普段からしっかりしないといけない、と改めて強く感じました。

また、体験先の方に質問をした中で、特に印象に残っているものがあります。その言葉は「今を一生懸命にやること」です。今を一生懸命に、何事も一生懸命に、という言葉の中

には、とても大切で大きな意味が込められています。私は、その言葉を忘れずに、一度しかない「今」を「一生懸命」に頑張っていきたいと考えるようになりました。何かに行き詰まった時に、この言葉を思い出せば、もっと頑張れる気がします。

私の考え方は、まだ甘いかもしれませんが、これから色々なことを体験して、学んでいく中で、きっとやりたいことが見つけれられると思います。そのためにも、この職場体験で学んだことをわすれないで、やりたいことに向かって努力していきたいです。

今回の職場体験学習で味わった、仕事をすることの喜び、そして大変さは、全てこれからの私に必要なことばかりでした。このような貴重な体験ができて、本当に良かったと思います。そして、いつか本当に「喜びの瞬間」を味わえる職業を見つけて、その仕事をずっと続けられたらいいな、と思います。

初めて知ったこと

大田区立大森第二中学校 三年
梶川 藍子

私は中学校に入学してからの三年間、家庭科の授業や技術科の授業でとてもたくさんのことを学べたと思います。家庭科の授業や技術科の授業では、他の実技の授業や、英語や数学などの授業とは大きく違い、とても日常的なことをたくさん

学びました。それは、当たり前のようなことでも、日々の生活に大いに役に立ちました。まず、どちらの授業も同様に、自分でやることの大変さに気付かされました。例えば、家庭科の調理実習では、りんごの皮をむくことさえも大変でした。普段、家でお菓子を作ったことが何度かあり、私は自分で料理は嫌いではなく好きなことのひとつだと思っていました。しかし、私はそれまで包丁を使って皮をむくことを一度しかしたことがありませんでした。それは、包丁を使い皮をむくのは手を切ってしまうので恐く、うまくできません、それっきりになってしまっていたからです。そのとき、隣にいた同じ班の女の子は、慣れた手つきで、りんごの皮をするすむいていきました。私は、それを見て、正直くやしう思いました。しかし、自分ができないことを、何でもないようになってしまう人を見ると、本当に些細なことでも、やはりカッコいいと思っています。

また、家庭科の裁縫の授業では、簡単だと思っていたことが全くできなくて本当に驚いてしまいました。それは、いつも自分でやっていなかったからだ、すぐにわかりました。自分でやるのは面倒に思、親に任せてばかりだったので、見てただけで、したことがありませんでした。人がやっているのをただ見ると、自分で実際に行動するのは、こんなに違うのかと初めて知りました。毎日、学校に通っていても、料理ができるか、裁縫ができるかなんて、わざわざ話を聞かなければ全くわかりません。しかし、家庭科の授業では、普段の生活の仕方まで、そのまま表れてしまふ授業なのだと思います。家庭科の授業は家庭という言葉が使われて

いて、そのままだけれど、本当に家で必要なことをたくさん教えてくれる授業だと思います。大人になって自立した人間になれるように、今から家庭科の授業で、自分のことは自分でできる大人になれるよう努力したいです。

技術科の授業では、やはり家庭科の授業と同じように、自分でやることの大変さを知りました。それは、本当にちょっとしたことです。木を二つに切るというのは、聞くだけだと、何も難しく感じません。しかし、実際にやってみると、真っ直ぐに切る、切り口をきれいに切るなど、色々なことに気をつけながら作業しなければなりません。それまでは、大人になって木を切ることなんて、きっと無いのだろうから、なぜやる意味があるのだろうと、ずっと疑問に思っていました。けれども、改めて周りを見てみると、私たちの周りには木で作られた家具や小物がとてもたくさんあります。しかし、それらは全てすでに作られたもので、自分で作ったものではありません。私たちはそれだけ人に頼っているのだと思います。今では工業などで機械を使うことができるけれど、昔は一つ一つ手作りでとても大変だったのだろうと思いました。

他にもペン立て作りでは、作業を始める前に、見本を見たとき、こんな物を自分の手で作れるはずがないと思っていたものが、何時間かけて形になっていくのは本当にうれしく思いました。本当に自分でできるのか、わからなくても、自分なりに頑張って最後までやれば、それは、ちゃんと形に表れて自分のもとに返ってくるのだと思いました。また、改めて考えてみると、私たちは普段、すでに作られた物しか見ることがありません。今では時計や木の箱など、ありとあらゆる

るものが、信じられないほどの安さで売られています。しかし、そんな安いと言われているものでも、当たり前のことかもしれないけれど、必ず、それを作っている人がいるのだと思います。私たちは、物を安いからといって、買い、すぐに捨ててしまうなど、物を大切にすることを忘れてしまっている気がします。けれど、それを実際に作っている人の気持ちになると、もっと物を大切にしなければいけないと思いました。技術科の授業とは、少し離れてしまったかもしれないけれど、物を作ることによって、たくさんの方に気づかされました。

これから、技術科、家庭科の授業で学んだ皆さんのことを生活に生かしていきたいです。

将来と自分

大田区立大森第二中学校 三年
栖原麻衣

私は小さい頃から様々な夢をもってきました。聞かれる度になりたい職業が違っていったときもありました。中学に入ってから自身で進路を考えるようになりました。授業中、将来自分はどのようなのかと考えてもまだ先のことだから、どこか投げやりなところがありました。

でも今、中三になり本気で自分の進路を考えなくてはいけなくなりました。先のことなんて今いくら考えても分からない、というのは確かにその通りだと思います。でもそれと同

時に自分から逃げることはないかと思ひます。だから私はしっかりと自分と向き合い、考えてみることにしました。

まず、私は音楽が好きです。家にいるときは何かしら音楽を聞いています。また、小二からずっとピアノを習っています。一曲を弾ける様になるまで三ヶ月以上かかるときもありません。どうしても弾けない部分があり、途中でやめたくなつたことは数え切れないほどたくさんあります。それでも私が、今まで続けてくることが出来た理由は三つあります。一つは弾けた時の達成感です。それまで出来なかったことが出来る様になったときの嬉しさは言葉で言い表すことが出来ないほどです。二つ目は自分に負けたくないということです。弾けなくてそこでやめてしまつては、その後二度と弾けないと思ひます。出来ないことの悔しさよりもそこで諦めてしまう方がもっと悔しいと思ひます。三つ目は単純ですが最も大きな理由です。それはピアノが好きということです。好きだからこそ、どんなに嫌だと感じることもあつても今までやってこられたのだと思ひます。

このように、私は音楽を通して様々なことを学んできました。だからまず一つ、自分が好きで、そのことや経験を生かせる職業に就きたいと思ひました。

次に、私は中二の時職場体験で保育園に行きました。0歳のクラスで一日体験することになりました。まだ自分の気持ちを上手く伝えることの出来ない子を相手にする仕事です。私は「泣いたりしたら職員の方が助けてくれる」というような甘い考えをどこかにもっていました。でも保育士の方は私を中学生としてでなく一人の人間として扱ってくれた様に感

じました。また、昼寝の時間には保護者との連絡帳の記入や書類の整理などの仕事があり、一日中子ども達のことを考える大変な仕事なんだと感じました。保育士の方の一人は「保育士は、命を預かる仕事だから甘い仕事じゃない。でもとても楽しい仕事だ」といふ様なことを言っていました。私は自分の仕事に誇りをもっていることは、何てかっこいいことだろうと思ひました。そして、あんなに甘い考えをもっていた自分が恥ずかしくなりました。

私は職場体験を通して、責任と誇りをもって働きたいという思ひをもちました。また、自分自身が楽しむことも大切なことだと思ひました。

色々考えてみて、私が目指したいと思つた職業は小学校教員です。今まで私は周りの人達に支えられ、様々なことを教えてもらいながら生きてきました。辛いことや悲しいこともありました。でも、それを越えるくらいの楽しいことがたくさんありました。まだ中学生である私の経験は大人から見ればほんの小さなことかもしれませんが。だからこれから先も、失敗を恐れずたくさんの方に伝えていきたいと思ひます。そして、それらを多くの人に伝えていきたいと思ひます。

しかし、簡単に夢が叶うはずありません。これから高校生になり、大学生になり、夢が変わるかもしれません。でも、もしそうなつた時に「ああ、あのときちゃんとやっていたらよかたな」といふ様な生き方だけはしたくないです。今はとにかく小学校教員という目標に向けて頑張っていこうと思ひます。目標があれば、学校の勉強もそれ以外のことも全力

で頑張れると思います。

家族や周りの大人に決めてもらった道ではなく、自分自身で決めた道だから失敗したり嫌になっても言い訳したり引き返すことは出来ません。しっかり前を見て思いやりの心を持ち、夢を現実のものにしたいです。

職業体験をして

大田区立大森第二中学校 三年

宮 本 真 希

私が二年生のとき、学校の総合学習で自分の好きな職業を体験できる、職業体験を行いました。私が選んだ職業はファミリーレストランです。理由は将来社会に出た時に、大切なことが学べると思ったからです。

まず、仕事をする前に教わったことが三つあります。一つ目はお客様が不愉快にならないように、元氣よく笑顔であいさつをすることです。二つ目は手をきちんと洗い、髪の毛が食べ物に入らないようにして清潔を保つことです。これらのことは日常生活においてもかせないものだと思います。私も笑顔であいさつされると良い気分になるし、衛生面に気を遣った食べ物を食べると、とてもおいしく感じます。

そして三つ目は、席の案内について教わりました。よく禁煙席と喫煙席とで席が分かれていますが、実はさらに座席の区別がされているのです。例えば、同じ禁煙席でも家族で来ているお客様には話しながら食事が出来るように奥側の席に

案内して、サラリーマンなど食事をしながら仕事をするお客様には集中できるように手前の席に案内します。このように、全てのお客様が気持ちよく食事が出来るように細かいところにも気を配っているのです。

職業体験当日、まず最初に体験したのは出勤時にトイレがきれいか確認する仕事で「五分間チェック」と言います。次に、水とおしぼりを出すのを体験しました。この時にも注意しなければいけないことがあります。それは、時間がたつて水が溶けてしまった水を取り替えることです。そのためには常にお客様のコップを気にしていなければなりません。店員さんたちを見ていると何か他のことをしていても、すぐに気が付いて行動しているのですすごいなと思いました。

最後に体験したのは、「中間バッシング」と「バッシング」です。「中間バッシング」とは、お客様がまだいる状態で空いている食器をさげることです。「バッシング」とはお客様が帰ってから食器をさげることです。ここで気が付いたのは、店員さんたちが「バッシングお願いします。」や「バッシングに行きます。」などと、お互いに声をかけ合っていたことです。声をかけ合うことで、チームワークが成り立っているんだなと思いました。

その他にも、空いている時間にやる仕事があります。例えば、熱湯で消毒されたスプーンなどをふく「シルバーふき」や氷の補充、お客様が気持ちよく食事ができるように玄関のはき掃除や窓ふきです。

初めはとても緊張していて、ぎこちない私でしたが、店員さんの優しい指導のおかげで次第にテキパキとこなせるよう

になり、仕事が楽しくなりました。

しかし、お昼頃になるとお客様も増えて午前中よりも忙しくなりました。そして私がお客様に水とおしぼりを出していた時、お客様に「すみません。」と声をかけられ、料理の注文を頼まれました。注文の受け方は教わっていなかったのので、戸惑っていると店員さんの一人が来て代わりに注文を聞いてくれました。

私はどの仕事も簡単にできるものではないことを改めて実感しました。そして普段「お客さん」という立場でファミリーレストランに行きますが、今回の職業体験で初めて店員の立場を体験して、学んだことがたくさんあります。

まずはおお客様の気持ちを考えることです。清潔を保つことや座席の区別や、笑顔であいさつをすることで、全てのお客様が気持ちよく食事ができるのです。また、あるテレビ番組で見たことがあります、ファミリーレストランでよく見かける伝票入れにも工夫されています。それは、落としても転がらないように斜めに欠けた筒状の形になっていることです。このようにお客様の気持ちを考えて細かいところにも気を配っているのです。

次にお客様とのコミュニケーションも大切だが、仲間とのコミュニケーションも大切なことが分かりました。なぜなら仲間とのチームワークが成立っているからこそ、お客様に美味しい料理が出せるからです。そしてそれが、ファミリーレストランの人気の秘訣なのかもしれません。

最後に感謝の心です。今回実際に働いてみて、仕事の大変さや私が今何不自由なく生活できるのは、お父さんやお母さ

んがいつも一生懸命働いてくれているからだということが初めて分かりました。だから、この感謝の心をいつまでも忘れてはいけないと思いました。

私はこの職業体験で学んだこと、感じたことをこれからの生活に生かしていきたいと思っています。

職業体験〱父子の対話

おやこ

世田谷区立山崎中学校 二年

桑 本 薫 平

今年の夏休みは自分の人生において忘れられない、また重要な意味を持つであろう経験をさせてもらいました。

それは職業体験です。

僕は希望通り、衣料洋品店「カジュアルハウスーYOU」さんにお世話になることができました。YOUさんを選んだ理由はいくつあるのですが、アパレル関連のこととか難しいことではなく、以前に買い物をしたとき気さくだった店長さんに惹かれたからです。少し人見知りの僕は、どうしても優しくそうな人を選んでしまします。(本当に優しい人でした)。それでも友人三人と行った初日は緊張しました。(でも、独りじゃなくて良かった。仲間は本当に心強いもんだ！)

笑顔の店長さんは、ズーッと笑顔です。客商売をするには笑顔を作らなきゃいけないのだろうか?と思いました。でも、店長さんはお客がいない時も変わらず笑顔でした。

帰って父に話すと「商人は涼しげに笑っているくらいが清々

しくていい。」と言っていました。とってつけた笑顔は鼻につくそうです。そういうえば顔は笑っていても目が鋭い人がいますが、そういうことでしょうか。難しいことです。

父は余計なことは考えず、面倒くさがらずにお客さんに感謝していればいいと言っていました。ただし、本気じゃなければお客は必ず離れると。第六感というのだそうです。わけがわからなくなってきました。

三日間はあっという間に過ぎました。最終日に「ありがとうございます」と店長は僕たちにハンカチとくつ下をくださいました。勿体なくて使えません。労働の楽しさを知った気がしました。ところがそれから一週間がたったころの話です。家族でファミリーレストランに出かけました。

小学生の弟が食べていたパフェにプラスチックの破片が入っていました。一度口に入れたため危ないところでした。

父が店員さんに言うのと、すぐ店員さんが来てすぐく謝っていました。店の中は寒いくらいなのに店長さんはすぐく汗をかいています。自分のミスでもないのに謝らなくてはならないなんて、仕事は楽しいことだけではなさそうでした。帰り道に父が言いました。仕事は大変なことがあるんじゃないって大変なのが仕事と違っていたほうがいい。ほとんどの仕事なんてできのいい中学生ならできるものだ。つまりさっきのようなアクシデントとの戦いが仕事であって、そういう時に人間の価値が決まるのである。調子のいい時には見えてこないということでした。

大変なのを覚悟して、なお悲観するなと言われました。複雑な思いを胸に刻みました。

恥ずかしいけれど僕は、サッカーや野球のルールもよく知りません。だから、夢はJリーガーやメジャーリーガーなんて、すごいものじゃありません。

だけど、せっかく働くのなら好きなことを職業にしてみたいです。どうやら楽しい事ばかりじゃないらしいけれど、これから探します。

僕の好きな言葉に「NO FEAR」という言葉があります。和訳すると「恐れない」という意味です。「NO FEAR」がモットーです。

父は「やりたいことが分かったら、成功したも同然だよ。」と言ってます。やりたいことを考えてみます。

本当に成功するのかなあ？

職業体験を終えて

世田谷区立喜多見中学校 二年

福田 麻衣

私は、社会人として仕事をするとか、働くということとはもちろんまだない。だから、職業体験をするということ、その意図が体験前によく分からなかった。私が福祉作業所を選んだことには、特に大きな理由もなく、ただ単に友達が行くから私も一緒に行こう、という軽い気持ちからであった。しかし、この職業体験を通して、働くということの意味が少し分かったと思う。さらに、大切なことを知り、学ぶことが出来たので、福祉作業所を選んで本当によかったと思う。その大切な

ことは「あいさつ」のことだ。職場の人が探していたものを見つけて手渡ししたとき、「ありがとう。」と言われた。こ
う言われた時、私はとても嬉しくなった。家族にも、いつも
言われている言葉だが、この時は職場の人から言われたから、
とても新鮮だったのだ。この時、今までにない程「ありがと
う」という言葉がきれいで素敵な言葉だと感じた。それに、
朝も「おはようございます。」と大きな声であいさつをする
と、職場の人たちに「おはよう。」と笑顔で返してもらえた
ので、とても嬉しかった。朝の一番最初のあいさつが、こん
なに自分を嬉しくしてくれるとは思わなかった。さらに、爽
やかな気分になり、朝の始まりからうきうきと心が弾んでい
る自分にとっても驚いた。こうして、私はあいさつの重要性に
気付くことが出来た。これが、今回の体験で一番学んだこと
だと思う。もちろん、今までもあいさつはしていた。だが、
随分前からしているため、序々に慣れ、挨拶の重要性を忘れ
てしまったのだ。だから、新鮮に感じたのだと思う。でも、
この体験を通してもう一度あいさつの重要性に気付き、思い
出すことが出来た。一度は忘れてしまったが、きっともう忘
れることはないはずだ。

このように、大切なことに改めて気が付いたり、学ぶこと
が出来てこの三日間をとっても有意義に過ごせた。もしも、これ
が例年通り一日間の体験であればこんなに素晴らしいことを学
べなかったと思う。今年は初めて体験期間を三日間にしたそう
だが、これはとても良く、三日間のよさを学べた。一日目は職
場の人たちに教えてもらいながらの作業だったからだ。まだ勝
手も良く分からない上、慣れない作業が多く、作業効率もとて

も悪かった。一日だけであったのなら、何かを得られるような
こともなく体験が終了していたと思う。なので今後体験する人
たちにも大切なことに気付いて欲しいと思う。

今回の職業体験の意図は、私たちの進路や将来の道の選択
の参考にしていく、ということではないだろうか。おそらく、
来年の今頃はもう進路決定に向けて、学習面・生活面に必死
の努力をしているだろう。だから、職業体験を通して自分の
やりたいことや得意なことなどを見つける、「自分探し」を
今のうちにしておかなければならない。

私は、将来医療に携わる仕事に就きたい。だから、福祉関
係の仕事に就きたい訳ではないが、この体験で学んだことは
役に立つと思う。そして、私が社会人になったら、寛容な気
持ちで人に接し、細かい気配りが出来る人になりたい。また、
会社の利益の歯車の一部ではなく充実した生活を送りたい。
辛いことも自分の心の糧とし、「みんなのため」と言えるよ
うになりたい。これらのことが叶ったら、今回の職場の人た
ち、福祉に生きる人のように、きらきらと光る世界で生活出
来るのではないだろうか。

職業体験を終えて

世田谷区立喜多見中学校 二年

渡 部 愛 理

私は職業体験の三日間、衣料販売の店へ働きに行きました。
この職業を選んだ理由は、日頃よくお世話になっていて自分

に一番身近な職業であると思ったからです。しかし、普段人とのコミュニケーションをとることが苦手な私にとっては、店員さんやお客様と話をすることが大きな不安の一つでした。日が経つにつれ、どんどんこの不安は大きくなっていききました。そして時は経ち、すぐに体験初日はやってきました。

体験初日、私は三十分程前にお店に着きました。お店に入ると商品にはカバーがかかっており、店員さんも少ししかいませんでした。今まで私が見てきた開店後のにぎやかでいつもたくさんの人達がいる店内とは全く違い、初めて見る静かな光景でした。開店二十分前を過ぎた頃、店員さんの数はいつのまにか二・三人増えていて、すぐに開店準備ができてしまっていました。店員さん一人一人が店内をかけ回り、忙しそうに働いていました。誰一人として仕事をおこなっている人や、気を抜いている人はいませんでした。店員さん同士で声をかけ合い、協力し合っていて、私は店員さんのチームワークの良さと、仕事の正確さにとても驚いたとともに、ただそれを見ていることしかできなかった自分の無力さを実感しました。

とうとう店が開店しました。私も初めて仕事をもらい、少しでも店員さんたちの役に立てるようにと店長さんの説明をメモしてから、さっそく仕事にとりかかりました。「前出し」と呼ばれるその作業は、よりお客様に見やすいよう、取りやすいように工夫された仕事であり、一見、ただ棚の奥にある商品を前に出すだけの簡単な作業に見えますが、それだけで店の雰囲気やお客様からの店の印象も変わってくるくらい大切な仕事でした。最初その仕事をしていた時は、店長さんに言われた通りにただ商品を前に出していました。しかし、お

客様の数が増えるにつれて、私はある事に気がきました。仕事をしている途中、何人ものお客様が私の前を通って行ったにも関わらず、私は「いらっしゃいませ。」と一回も言っていないのです。仕事を始める前に店長さんが「接客で大切なのはまず、いらっしゃいませと言うことだ」と言っていたことをすっかり忘れていた私は、体験初日から大きなミスをしてしまいました。その後慌ててお客様に「いらっしゃいませ」と言ってはみるものの、声が小さかったり笑顔が全くなかったりと、他の店員さんたちのようにうまくはいきませんでした。

思い返せば、私があいさつを忘れていた時、近くにいたお客様たちはどう思っていたのか不安になります。「なんて無愛想な店だ」とお客様が一人でもそう思っただけの店のイメージが悪くなったとしたら：と考えると、ちょっとしたミスが大きなミスへと発展していく仕事の恐さ、そして一人の店員のミスが店全体のイメージへと関わる仕事の責任の重さを私は痛感しました。

今までは何かで失敗しても「まだ中学生だから」と言われ、自分自身もその言葉を心のどこかで頼りにしていました。しかし、社会へ出て働けば、そんな甘えはもろろん通用するはずがありません。私はこれが中学生と大人との違いである実感したとともに、お金は自分が思っている程楽に稼げるものではないという現実の厳しさを知り、これから自分も社会へ出ていかなければならないということが少し恐くなりました。残りの二日間、どのような仕事が行っているのだろうと半分緊張しながらも、私は初日の仕事をなんとか終えること

ができました。

家に帰ると、その日一日の疲労がふりかかってきて、私はすぐに寝てしまいました。働きに出る前までは「たったの六時間」だと思っていたのに、実際仕事してみると「長いなあ」と感じている私がそこにいました。これを毎日続けている店員さんたちは、とても大変なんだと改めて思いました。そしてこの時、私は、どうしてこんなに苦勞してまで働こうとするのだろうと不思議に思いました。

体験二日目、私は店長さんに「品出し」という初めてする仕事を任せてもらいました。お店に入ると私はさっそく昨日の失敗を生かしてお客様に明るく笑顔であいさつができるよう心がけました。すると、お客様の為にしていたあいさつなのに、なんだか自分までいつのまにか明るい気持ちになり、さわやかな気分です仕事をする事ができました。

その後、私が品出しをしている途中にお客様に商品の場所を質問されました。いつものように私は他の店員さん呼びに行ったのですが、どの店員さんも皆接客の最中でした。向こうの接客が終わるまでお客様を待たせる事はできませんし、だからといって無理やり店員さん呼び止める事もできません。そこで私は、自ら商品を探しに行こうと決め、店内を駆け回りました。すると運が良くその商品はすぐに見つかり、お客様に無事案内する事ができました。その時お客様が、長い時間待たせられていたにも関わらず、私に「中学生だからダメかと思っていたけれど、見つかってよかった。ありがとう」と言ってくれました。私はその時初めてお客様に喜んでもらえて、すごく嬉しかったし、疲れるだけだと思って

いた「仕事」が初めて楽しいと思えました。また、私は「仕事のやりがい」を身をもって感じる事ができました。

私はこの三日間で、仕事の苦しさを学びました。しかしそれ以上に、仕事のやりがいや楽しさを学ぶことができました。そして「仕事」というものは、人と人をつなぎ、助け合う世の中を作っていくためにあるのかもしれない私は思いました。いつか私も、そんな世の中を作っていきたいです。そのためにも今は、学校で学べることを学び、未来へとつなげる道を少しずつ作っていききたいと思います。

厳しい体験

杉並区立中瀬中学校 二年

伊 藤 駿 太

僕は職場体験で、農園を経営している篠さんの元で、農業を体験しました。僕の他に二人の友達と一緒にいました。一年生の頃、職場訪問で行った所と同じだったので、あまり緊張しませんでした。体験したことのある仕事だったので少し仕事を甘く見ていました。事前学習で、時間厳守と厳しく言われていたので、当日は遅刻することはなかったです。

初日に篠さんの家に着いた時には、もう篠さんは働いていました。おはようございますと言いたいの、口がもごもごしてうまく言えません。すると、篠さんが近づいて来ました。僕は少し恥ずかしがりながら挨拶をしました。笑って答えてくれた篠さんの印象は「優しい人」でした。

篠さんから、一日の仕事の内容を説明してもらい、作業に入りました。その日の作業は二つでした。一つは、ビニールハウスの中と外にある苗に肥料をあげることです。決まった数を全ての苗にあげるのは難しく、途中二、三個ぬかしてしまったり、たくさんミスがありました。しかし、その少しの間違いでさえすぐに篠さんは見つけてしまいました。二つ目は小さい苗に入ったブルーベリーを大きい苗に入れかえることでした。三人で作業し、その日は約七百個の苗を移しかえました。篠さんはこの作業を毎日一人でやっていると考えると、僕は僕達よりかなり年齢を重ねている篠さんが、とてもかっこよく見えました。自然に尊敬する気持ちがありました。一日目の作業は終わりました。けれども、まだ四日も作業が残っていると考えると、それだけで疲れた気分になりました。

二日目は、朝からとても暑かったです。一日目と同じ時間に集まり、一日目の作業の続きをやりました。その日は苗約三百個を移しかえ、前日との合計約千個を終えました。次の作業は農園内の掃除でした。熊手を使って枯れ葉を集めました。大きいビニール袋五、六個がパンパンにふくれて、掃除は終了しました。自分が掃除した後がきれいになっているのを見ると、とても嬉しくなり、そこにやりがいを見つけました。

その後、三日目、四日目と同じような作業をして、職場体験を終えました。毎日休憩時間に篠さんと話をしました。その中で特に印象に残ったのが、

「農業のような仕事をやっておくと、将来どんな仕事につい

ても役に立つ。」

という言葉でした。最初はその言葉の意味が全く分かりませんでした。でも、作業をしていくにつれて、だんだん意味が分かってきました。確かに、簡単な作業だけれどずっと続けることは、難しいと思います。僕も途中であきてしまいました。けれども、同じ仕事を続けることによって「集中力」がついたと思います。

この体験を通して、仕事には簡単なことなど一つもないことが分かりました。簡単だと思っていた仕事も、やってみるととても難しく、楽だと思っていた仕事にも色々な苦労があることに気がつきました。

僕はまだ将来の夢が決まっていません。けれども、今回の職場体験で、仕事の大切さ、難しさが分かり、自分のためになったと思います。僕も将来年をとり、人に教えることができるようになったら、篠さんのことを思い出して、優しく、厳しく教えられるようになります。また、今回手に入れたものを手放すことなく、将来につなげていければいいなと思います。改めて、篠さんにありがとうございますと言いたいです。

農業とは、人の食べる物を作る仕事です。いわば、人の生命を支える仕事なのです。地味で単純なこの仕事をコツコツとしてくれる篠さんがかっこよく見えたのはそんな理由からだったのかもしれない。今回の職場体験は僕にとって「厳しい体験」でしたが、その厳しさの中から、僕はたくさんのことが学べました。

人とのつながり

杉並区立中瀬中学校 二年

川 野 裕 貴

私は、今回の職場体験を通して、人と接する仕事の難しさを肌身感じた。そして、それと同じぐらいに、人に何かをしてあげた時に「ありがとう」と言われる嬉しさを感じたのだ。

私は、五日間の職場体験で老人ホームへ行った。仕事は、出迎えから始まる。笑顔ではっきりと、「おはようございます」と、一人一人に声をかけた。高齢者の方は、来て最初に工作をする。それを、私達スタッフは手伝う。私が行った時は、壁かけとつまようじで一輪さしを作った。初めて行った日、私は工作の手伝いが役目なのに、どのように手伝えばいいのか分からず、自分一人で作ってしまった。しかし、だんだんと日にちがたつにつれて、うまくコツをつかんだ。高齢者の方が「やり方が分からない。」と言えば、私が「つまようじを両面テープの上に張って下さい。」と、声をかけながら実際に最初だけ見本としてやってみせてあげ、苦手なところや困難なところがあれば、そのところだけ手伝ってあげるようにした。

この他にお茶を配ったり、昼食の配膳をしたりといった仕事をした。私は、お茶や昼食を渡す時に、「お茶、熱いので気を付けて下さい。」「○○さん、おまたせしました。」などと、一言そえて渡すようにしていた。このような行動がとれ

るようになったのは、スタッフの方からアドバイスをもらったおかげなのだ。

老人ホームにいた間、私はたくさんの方と話をした。あるおばあさんとは、飼っている猫のことで話に花が咲き、またあるおばあさんからは、九人兄弟ときいてびっくり！ それぞれに「物語」があり、話を聞いていておもしろかった。しかし、同じことを何度も話す方もいたのでどう対応しているのか困ったことや、昔の言葉で分からないことがあって、普段の会話の中では経験の無いことに戸惑ってしまった。それでも、高齢者の方が楽しそうに話をするので、私は相づちを打ちながら、時には笑顔で話を聞いた。

最終日の前日、私は車の送迎の見学に行かせてもらった。その時は、練馬区の方まで行き、ずいぶん遠くから来ているのだなあと、思った。ある時、スタッフの方から「体験をしてみよう？」と尋ねられた。そして、その問いに私は「高齢者の方とふれあえて楽しい。」と答えた。正直、楽しかったけれど介護の仕事は予想以上に大変だった。そのことが顔に出てしまったのだろうか。そのスタッフの方が「私が小学生の時にもう、祖母の面倒をみていたから、その時から介護の大変さは分かっていたよ。」と話してくれた。

私は、このスタッフの方の話を聞いて、一人一人の高齢者に対する真剣な気持ち、人を介護するという重みを感じた。介護の仕事とは、一人一人の方と向かい合うことではないかと思う。そうした中で、人と人とのつながりが出来てゆくのだろう。

今回の五日間を終えて、仕事をするといことは、何かに真

剣に取り組むことではないかと思う。そうすることで人々から感謝され、仕事をする中での喜びを見つけ出せるのだと思う。

また、仕事をするうえで、ちょっとした心遣いができればいいと思う。何かを渡す時に一言そえて渡したり、誰かが困っているようならそっと手助けをしてあげたり、そうした小さな気配りが大切なのだ。

私が今回学んだことは、あいさつ・人への接し方など、どれも人として大事なことだ。今回学んだことを、これから活かしていければいいと思う。

職場体験で得た事

杉並区立中瀬中学校 二年
千葉 由 稀

私は、七月七日から十三日までの五日間、職場体験をしました。体験させてもらった場所は「コンビニエンスストア」です。私の家からとても近い、よく利用するコンビニエンスストアでした。

体験する場所が決まった時、思ったことが二つありました。まず、私の希望が通って嬉しい気持ちです。そして、もう一つは、職場体験を終えた後、コンビニエンスストアに行きにくくなってしまったらどうしようという心配です。一年生の時、事務所訪問でお世話になった雑貨屋さんに照れくさくて行きづらくなってしまったからです。

不安でいっぱいだった初日。

一緒に体験する友達と待ち合わせをしてから行きました。緊張のあまり、十分以上早く着いてしまいました。お店の方が

「本を読んで待っていて。」

と、優しく声をかけてくださり、ほっとしました。お店の仕事をしながら、私達中学生を受け入れるための準備もしてくれていることがわかり、とても嬉しくなりました。

最初に教えていただいたのは、商品の整理と補充の仕方です。まず棚をきれいにふいておきます。次に商品を機械を使ってバーコードの読みとりをします。読みとりの終わった商品をきちんと棚に並べていきます。慣れるまでは、うまく出来なくて胸がドキドキしてしまいました。棚をふく作業にしても、商品を一つ一つ動かしてからふくので本当に大変です。虫の死骸が棚にあり、大きな声を出してしまいそうになりました。棚をふいている時に担当の方から、

「お客さんが来たら、しっかり挨拶してね。」

と、言われました。けれども私は、挨拶をするタイミングがわからず、なかなか声に出して言えませんでした。やっと言えても恥ずかしくて声が小さくなってしまいました。

「もっと大きな声でお願いね。」

というアドバイスにうなずきながらも、なかなか大きな声で挨拶ができませんでした。学校でも挨拶のことは、よく先生から話がありましたが、実際に社会に出て働いてみると、本当に大切なことなのだということがよくわかりました。これからは、家や学校でも、大きな声で挨拶をしようと思いました。

た。

次に教えていただいたのは床の掃除の仕方です。店内に砂もほこりも少しも残らないように、とてもいいねいに掃きま

す。同じ場所を何度も掃き、ちりとりを何度も使いました。二日目は、商品の整理と補充をし、掃除が終わってから、新しい仕事を教えていただきました。レジに立ち、商品を袋に入れる作業です。袋の大きさが何種類もあり、びっくりしました。商品を見て、すぐにどのサイズの袋に入れるのかを見分けるのはとても難しそうです。初めのうちは全く見分けがつきませんでした。一日体験するうちに少しずつわかってきました。

三日目は、銀行に両替えに行きました。両替えの仕方がわからなかったのも、銀行の方に教えてもらいました。コンビニエンスストアに戻ってからは、ずっとレジ打ちをさせていただきました。小銭がうまくとれなくて、床に落としてしまいました。恥ずかしかったです。

四日目は、レジ打ちが少しくなりました。上手にとれなかった小銭も、ようやく慣れてきてうまくとれるようになりました。新しいことも教えてもらいました。郵便物の扱いについてです。これはとても難しくて、覚えるのが一番大変でした。

最終日は、今まで教えていただいた、すべての仕事をしました。最終日ということもあり、だいたいのがスムーズにできました。仕事がうまくできるようになると、今までの緊張感が嬉しさに変わりました。初めて仕事が楽しいと思える一日でした。

この体験を通して、たくさんのことを学びました。働くことがどれだけ大変か、接客がどれだけ難しいか、挨拶がどれだけ大切かなど、色々なことをすべて本当に良かったと思っています。私達中学生のためにたくさんさんの時間や労力を使い、仕事を教えてくださった担当の方には心から感謝しています。私達を信じてレジまでまかせてくださり、そういう真心に答えようと、私達も一生懸命に働きました。この経験を将来に活かしていきたいと思います。「責任」を持って働くことの大切さを知ったことが一番大きな収穫でした。

一年の時とは違い、体験したコンビニエンスストアに笑顔で行くことができたことも嬉しく思っています。一年の時はたったの一日で、お店の役に立つことができなかったのも、照れくさく感じたのかもしれない。今回は、少しは役に立てたと思うので、ためらわずに行けるのかもしれない。人の役に立つことが生きていく中でとても大切なことだと実感できたとても良い体験でした。

職場体験で得た物

杉並区立中瀬中学校 二年

長岡隼斗

僕は、七月七日から十三日までの職場体験で、とても成長できたと思います。職場体験では井荻スポーツというスポーツ用品店でお世話になりました。僕はサッカー部に入っていて、スポーツ関係の仕事に興味があるので希望を聞かれた時

は、まっ先に「Ｉスポーツ店」と答えました。希望がかない、体験先が決まった時は本当に嬉しかったです。

店の掃除をし、商品が汚れないように、お客さんが入りやすいように店の中をきれいに整えることから教えてもらいました。荷物を運んだり、商品の値段をつけたりすることは思ったよりも大変で、休憩をとりながらいてねいにやりました。次は接客です。

「いらっしゃいませ。」

「ありがとうございます。」

お客さんが来るたびに、大きな声できちんと挨拶をするように言われました。きちんとした態度や礼儀作法が、この仕事をする上でどれだけ大切かを教えられました。僕が一番驚いたことは、とても小さな子供に対しても大人に対してするのと同じように、ていねいに挨拶をするように言われたことです。お店にくる人すべてに礼儀正しくしなければならぬのだということを学びました。

次に商品をきれいに並べました。新しい商品も次々に入ってきて大変でした。この仕事をしながらこれからは商品を見た時は、きちんと向きをそろえて置くように心がけようと思いました。お店の人の苦勞を知らずに、見た商品を違う所に置いてしまったことを反省しました。そしてお店の人に、「こんな事を毎日やって疲れないんですか。」と聞くと、「商売だからこんなことで疲れていないよ。」と言われました。

一番大変だった仕事は棚卸しです。店にある、すべての商品の、メーカー名、番号、品数を記録します。この仕事の一

番大変なところは、一文字でも間違いがあってはいけなことです。また、商品を高い所から上手に下ろすことにも注意しなければなりません。上手に下ろさないと商品が傷んで売れなくなってしまうからです。棚卸しには「集中力」が何よりも必要だと思いました。この集中力を使う仕事を毎日やっているお店の人は、本当にすごいなあと思いました。

靴やスパイクは、ずっと奥の方まで並んでいて驚きました。サイズ別、番号別できちんと並んでいることを知り、お客さんに見やすいように棚卸しがしやすいように色々な工夫がされているんだなあと感じました。色々なメーカーの名前を見て、商品を作って売るまでには、たくさんのお客さんの苦勞や工夫があるのだということに気がつきました、職場体験で働かせてもらわなければ、ずっと気がつきなかった大切なことです。職場体験で体験できて、本当に良かったと思いました。そしていてねいに仕事を教えてくださったＩスポーツ店の人達に感謝の気持ちでいっぱいです。

今まで全く気がつかなかったことの一つに「安売り商品」の並べ方があります。ただ店の前の目立つ所に置くのではなく、歩く邪魔にならないように置くことや真正面からの見た目をよくすることに気を遣います。商品そのものだけでなく、値段なども見やすくしておきます。実際に働いてみなければ、こんなにたくさんのお客さんの気配りをしていることを知る機会はありませんでした。僕達が明るく快適に暮らしていけるのは、こういう「働く人の気配り」があるからこそだと思います。

今回の職場体験を通じて学んだ、働くことの苦勞ややりがい、接客の基本や挨拶の大切さは僕の大切な宝物になりました。

た。これからは商品を大事にして、お店の人の気持ちを考えていきたいと思っています。

販売関係の仕事につく人は、きちんとした態度や礼儀作法を身につける必要があります。けれどもそれは形だけの、表面的なことではなく、人に対する「優しさ」や、何事もあきらめない「努力」が現れたものでなければならぬと思います。いつも優しく僕達に接してくれた「働く人達」が僕を一回り、大きく成長させてくれたように思います。教えてくれた一つ一つのことを忘れずに、これからの生活や社会に出た時に、教えてもらったことを思い出し、役立てていきたいと思っています。

職場体験から学んだ 「責任」ということ

杉並区立中瀬中学校 二年

松 下 清 一

七月七日から十三日の五日間、職場体験で杉並区の科学館に行きました。職場体験は一年生の時、肉屋さんのお店で経験しており、科学館は小学校の時から化学実験の講習に行っていましたから、今回はそんなに緊張しませんでした。

今回の職場体験は二人で行きました。最初の日、係りの人から説明を聞き、最初の仕事にかかりました。それは、予想もしていなかった「草むしり」でした。僕の予想では、実験などで使う道具などを片付けたりする仕事ではないかと思っ

ていました。物凄い暑さの中での草むしりは大変でした。すっかり疲れきってしまった僕たちを見て、係りの先生が、「草むしりも立派な科学実験なんだよ」と話してくれました。

「草も毎日毎日良く観察していると色々なことが発見できるんだよ」と言う説明を聞きながら、そういう思いで草むしりをする、何も考えないでやっていた時とは、何か違う気持ちで、作業することが出来ました。やはり、何事も注意深く色々なことを考えながらしないといけないんだなと思いました。それにしても、科学館の先生方は、何時も来館する人達の為に、暑くても我慢しながらやっている人だと思い、改めて仕事の大変さを感じました。草むしりが終わり、次に魚の鯉を移す仕事をして、お昼になりました。食事は先生方と同じ部屋で食べました。ある先生から、「草むしりは大変だったでしょう。」と笑いながら話しかけられ、少し緊張気味で食事をしました。

午後からの仕事は、近くの小学生と一緒にプラネタリウムを見ました。ここでは、ほとんど仕事らしいことは無く、小学生と一緒に見ている内に午前中の草むしりの疲れと、緊張から少しウトウトしてしまい、後で先生方に笑われてしまいました。これが、本当の職員で働いていたら笑い事では済まされないことだと反省し、やはり仕事は厳しいものだと感じて感じました。

二日目は、小学校の生徒たちと色々な実験をしました。やはり見ていると小学生の人達は、やる事がゆっくりしていて、僕も小学校の時はいくらだったんだなと、心の中で思い出しながら、それでも一生懸命生徒さんたちの面倒を見ていました。

やはり、ただ実験をする者と、を手助けする者では、見方、考え方が大きく違いこれが本当の仕事ということなのかと感じました。家に帰ってから父とそのことで話をすると父は、「そういうこともたしかに仕事の中に入るけれど、仕事の中で一番重要なのは、どんな仕事にも責任があるということを理解し、そういう目で先生方のすることを注意深く見ないと、いけないよ。そうすれば、もっと仕事とは、どういうものか分かるはずだ。」と言われました。

今の僕には、まだはつきり理解することは出来ないけれど、今回の職場体験を忘れることなく将来の仕事につなげていこうと思いました。

最終日は、又、草むしりをしました。最初の日と違い、仕事としての誇りを持って草むしりをする事ができました。

最後に館長から、「この科学館で何か面白いものがありましたか」と、聞かれました。最初は、なんて答えて良いかわからずもじもじしていると、館長は、「この杉並科学館も最初のころは、設備がとても良かったのですが、最近はこちらに最新の設備を備えた科学館が出来ているから、この科学館も色々と考えているんだよ」と、話されました。僕はこの話を聞きながら、毎日の仕事を責任をもって問題を起こさないようにするだけではなく、これからの新しい企画やとりくみを考えながらすることが大事なことでないかと気がつきました。大人の人達、何も言わず黙々と仕事をし、色々な事を考えているんだなあと、感じました。今までは、ただ言われた事をするのが仕事だと思っていたのが間違いだと言う事に初めて気が付きました。仕事というのは、与えられたことを

やるだけでなく、自分からやらなければいけないことをさぐることなんだということに気がついたのです。

最後に先生方に「ご苦勞様でした。良く頑張りましたね」と言われた時は、やっと少し仕事が出来たんだと嬉しく思いました。

将来、どんな仕事につくかわかりませんが、どんな仕事についても、小さいことにも責任をもって、そして常に新しい事にチャレンジする心構えをもちたいと強く感じました。僕も理科が好きなので、出来ることなら科学館の先生方と同じように、理科の勉強が生かせる仕事につきたいと思いました。学校での勉強をもっともっと頑張らなければと思います。科学館の先生方にお礼を言い今回の職場体験を終えました。

職場体験をへて

杉並区立井草中学校 三年

佐藤 知佳

私の学校では、中学二年の時「職場体験」という、いろいろな職場に行き、社会について学ぶ体験学習が五日間ありました。まず、行ってみたい職場の希望調査で、私は前からケーキやパンなど作ることが好きだったので、第一希望をケーキ屋さんにしました。実際には希望通りいかなかった人もいたのですが、私は希望通りケーキ屋さんに行くことができ、嬉しかったです。

また、私は働くことに興味があり、早く働きたいと思って

いました。そして事前授業などをし、期待をふくらませ、いよいよ職場体験の初日です。とても楽しみにしていたのですが、風邪をひいてしまい、ケーキ屋さんは食品を扱う仕事なので、ドクターストップがかかり、休まなければならなくなっていました。なので、二日目が私にとって体験の始まりでした。

最初お店に入る前はとても緊張しました。しかし、中に入ってみると、店員さんが優しく接してくださり、落ち着いて仕事をすることができ、自分が一番やりたかった仕事なので、始めは何よりも楽しかったです。次の日になると少し難しい仕事も増えて、一日が大変になっていきました。まず、朝きたらケーキをいれる箱をつくり、できているケーキを冷蔵庫にしまうことから一日が始まります。一見簡単そうに思いますが、ケーキはとても大きく、重く、少しでも傾けてしまえば崩れてしまうような場合もあります。そしてケーキのデコレーションなども教わり、初めは手こずってばかりだったけれど、できるようになったときは嬉しかったです。しかし、そんな気でいられるのもつかの間で、日がたつにつれて、いつもずっと立ちっぱなしの作業なので、足もだるくなってしまい、家に帰ると、いつの間にか横たわり寝てしまうぐらい疲れていました。そんな中、同じ作業を繰り返ししていると、だんだん気が散って集中できなくなり、なかなか上手く作業をすることができなくなっていました。けれども、店員さんはやはりプロで、やり方のコツもたくさん教えてくださり、スムーズにできるようになり、一日が終わると、とてもやりがいがあったように思え、上手くないこともあった

けれど、一つの作業が終わる度にとても楽しく思えました。

あつという間に三日間が過ぎ、とうとう最終日。最後の日には、いつも朝早くから夕方ごろまで立っているのも、もうへとへとでも疲れていました。しかしこれで最後になっってしまうので、今まで以上に進んで仕事に取り組むように努力しました。今までやってきたデコレーションやケーキ作りの補助など、たくさんさんの作業をし、知らなかったこともたくさん学び、手つきもスムーズにいくようになりました。そして店員さんが最後に、

「助かりました。」

と言ってくれたときは、涙がでるほどとても嬉しかったです。このとき私は、このお店の役に立てていたんだなあ、と実感しました。

私は、この職場体験で仕事の楽しさと共に、仕事をやりとげたときのやりがい、できなかったことが上手くできるようになったときの嬉しさなどを知ることができました。また、初めは仕事を甘くみていたけれども、たったの四日間でもこんなに疲れてしまったので、仕事を甘くみてはいけないうえ、と思いました。しかし四日間こんなにつらいことがあったのですが、今までやったことのない仕事をたくさんしたり、技術が必要な作業にも挑戦してみたりして、毎日が楽しかったです。私はやはりケーキ屋さんでいろいろな体験ができ、本当によかったです。この貴重な体験で得た数々の経験や、体験を通して考えたことなどを、将来につなげていきたいと思っています。

さらに、私はこの体験の中で、店員さんから感謝の言葉を

いただき、作ることの喜びを学びました。私はこのときの気持ち忘れずに、これからもケーキなどのお菓子を作り、今度は家族、親戚、友達などに喜んでもらえるといいなあ、と思います。また、これを発展させて、将来はもっとたくさんの人に喜んでもらえるような、自分のオリジナルなお菓子を作ってみたいです。

わたしの職業観

練馬区立石神井西中学校 二年

滝 沢 あゆ美

私の父の職業は大工です。私は小さい頃から大工である父の姿をずっと見てきています。だから父のスーツ姿というのはお葬式の時ぐらしか見た事がなく、ボロボロの作業着に頭に手ぬぐいを巻いて耳に鉛筆をはさんだ父の姿の方が見慣れています。

大工には日曜も祝日もありません。私が小学校低学年の時、友達に「今週の日曜日遊ばない」と聞きました。すると「ごめん。お父さんがいるから」と断られました。その事を家に帰ってお母さんに話すと、「会社は日曜日がお休みだからね」と言われました。私はその時初めてそれが普通なんだと知りました。大工はお客さんから注文が入れば日曜でも仕事をします。それに、家を建てる時は毎日作業をするので休みは雨の日ぐらいです。たくさん注文が入れば忙しくなり、家でも仕事仲間の人や材料を注文する為に電話をしています。逆に、

注文が無かったり梅雨や台風で雨が続くとういにやってくる長期休暇です。それに時間だって関係ありません。普通なら朝家を出る時間、夜帰ってくる時間が大体決まっていると思うけど、大工はそうではありません。仕事場が遠ければ朝早くに家を出て、夜遅くに帰ってくるという日が何日も続きます。時には、高速道路を使って行く場所もあります。雨漏りで困っているなどという電話がかかってきたら、それが例え夜でも行かなくてはなりません。仕事自体がそうだけど、そういう意味でも肉体労働です。

他にも父が大工で普通とは違ったことが色々あります。前に、母の妹に「お父さん何処に行っているの」と聞かれ、普通だったら「会社」などと答えるけど私も姉も「現場」と答えていたそうです。金づちの事も当たり前のように「げんのう」と言っていたし、家の中に釘が転がっているのも日常茶飯事です。

でも、私は父が大工で嫌だったことは一度もありません。むしろ良かったと思っています。もし、父がサラリーマンだったらきっと退屈だったと思います。私が小学生の頃、父はよく大工の仕事を手伝わせてくれました。道具を運んだりするだけだったけど、見たことも無い物ばかりだったし、何に使うかなど説明もしてくれました。他にも釘を打たせてくれたり、のこぎりで木を切らせてくれたりもしました。トラックの荷台に乗って遊んだり、そこに乗せて走ってくれたこともあります。本当はいけないことだけど普通だったら絶対に体験できないことです。父は父なりのやり方で私や姉と遊んでくれました。それは決して他のお父さんにはできないやり

方です。

「働く」というのは単に会社に行って仕事をするということだけではないと思います。「職業」という言葉を辞書でひくと「生活するためにする仕事」と出てきます。つまり掃除や洗濯などの家事もしないと生活できないので、立派な仕事だと思います。

私はまだ中学生なので働いたことが無いけどそろそろ進路を決めなくてはなりません。どんな高校に行って、どんな仕事に就くかを真剣に考えなければなりません。そんな時、相談するのはやっぱり人生の先輩である父と母です。私は父の跡を継いで、大工になる気はありません。両親もきっと自分のやりたい事をやらせてくれると思います。決して「何とかになりなさい」などとは言わないと思います。私は、そんな両親の下に生まれてとても嬉しく思います。家族のために一生懸命大工として働いてくれた父と、私のたくさんの相談に乗ってくれ、これからも乗ってくれるであろう母の下で、私は両親を誇りに思います。なのでこれから進路を決める時、私は周りを気にせず自分のやりたいことだけを目標にして生きていきたいと思います。それが大好きな両親への一生を捧げた親孝行になると思うからです。

私の夢

練馬区立石神井西中学校 三年

井 口 友 莉

私の将来の夢は国際公務員になることです。私が国際機関に関心を持つようになったきっかけは二つあります。

まず一つ目は、国連システムの一つである国連児童基金（ユニセフ）への募金が様々な所で行われていることです。私の中学校でも合唱コンクールと運動会で生徒会が行っており、国際連合の活動を身近に感じることが出来ます。

二つ目はマスメディアの一つであるテレビの影響です。私が具体的に貧しい国の人々の生活を知ることができたのはテレビの特集番組でした。そこで紹介されていたフィリピン人の少女は父親がいなくて、母親も病気で働けないので学校にも行けず、ゴミの廃棄場で売れそうな物を探して売ってお金をもらっているのです。又、フィリピンだけでなくサウジアラビアでもある少女が家計のためにほぼ同年の少女の家庭で働いていました。

私はこれらを知ることにより、世界には大きな格差があること、そしていかに私が住んでいる日本は優れた環境であるかということを感じました。

フィリピンの少女は薬や家族の食べ物を買うために働いています。日本は憲法二十五条に「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」とあるので、少女のように父親がいなくて母親も働けない場合、生活保護

を受けることができます。

サウジアラビアの少女が、主人である少女の学校の準備をしたり、元気に学校へ向かう生徒の後ろ姿を見て『私も学校に行きたい。』と思う一方で、日本は、小・中学生の親に「教育を受けさせる義務」があるので、学校に行かない子供はほとんどいません。

そして、自分の意思や意見を様々な人と交換し、どの国の人も豊かで安全に暮らせる世界に近づけたいと思うようになりました。また、その夢を実現できる仕事として国際公務員として働きたいと思いました。

国際公務員とは、国際連合や国連総会によって設立された機関、専門機関などの国際機関で働く人のことを言います。私が今できる国際協力は募金ぐらいしかありませんが、国際公務員になればより大きな国際協力ができるようになります。その大きな国際協力として、私は三つのことに取り組みたいと思っています。

一つ目は、より多くの人に現状を知ってもらい、協力の環境を広げることです。現在、メディアなどを使った活動は行われていますが、私は実際現地に行き、見て体験すると現実の激しさやまだ未解決の問題に気づき、さらに活動が活発になると思います。

二つ目は、環境に配慮した開発をすることです。今、多くの発展途上国が先進国に迫いつこうと様々な援助を受けながら努力しています。しかし、地球上での生活の土台となる環境が崩れてしまったら、私たちは生活することができません。欧米などの先進国はこのことを重く受けとめ、対策を立てて

いますが、発展途上国の中には代々受け継がれていく地球環境よりも目先の利益の方が得だと考える国が少なくありません。そのため、発展途上国の人々に自分たちがどのように環境にかわり、どれが環境にも人々にも一番良い方法なのかを知った上で開発を進めることが大切だと思います。先進国も発展途上国も環境をよく知り、大切にしていけば地球環境はより長く保てるはずです。

三つ目は話し合いによる問題の解決を進めることです。世界にはまだ紛争が続いている国や地域があります。紛争を行っている方は両方とも過酷な暮らしをして、早く平和に戻って欲しいと願っていると思います。人間は過去の歴史をふり返っても戦争を止めることなく何度も繰り返しています。それには複雑な原因があるからだと思いますが、戦うのではなく、話し合いによって解決するのが人間の進歩といえるのではないのでしょうか。強力な核兵器などを作る国よりも戦力を使わずに交渉などで問題を解決する国の方が、ある意味ずっと進んだ国だと私は思います。そしてこのような国を増やすために、さらに国々と協力し、国際連合に力をつけることが大切だと思います。

私はこれから三つのことに取り組んでいけるように、まず、海外留学などで異文化にも対応し、自分の意見を伝えることができるようになり、次にボランティア活動でよりくわしく現状を知ってから、国際公務員になりたいと思っています。これから様々な壁が出てくるとはありますが、自分で工夫・努力して夢をあきらめないでいきたいと思っています。

「技術・家庭」を学んで

足立区立第四中学校 二年

柿崎 慶太郎

中学生になって、技術分野の勉強が始まり、一年余りたちました。技術というと、実は、あまり得意ではありませんでした。実際に学んでみて、戸惑ったことは、思うように工具をうまく扱えなかったということです。それにより、作業もはかどらず、あまり綺麗に作品を完成させることができませんでした。コツもなかなかつかめず、慣れないうちは、凄くもどかしい気持ちでいっぱいでした。でも、一年生の最後の方では、ようやくコツをつかんで、クラスメートと楽しく比較しながら作業をしているうちに、いつのまにか手際がよくなっていった気がします。

年間を通して、技術分野において、「ものづくり」の基本を一から教わりました。例えば、木材に関しては、木材の板材へのけがき方や、両刃のこぎりの二つの刃の使いわけ方、かんなの刃の出の調整の仕方、かんなでの木材の削り方、卓上ボール盤の使い方、直角度等の検査の仕方、玄翁の使い方、玄翁での木材の接合の仕方、やすりのかけ方等を学びました。技術での作業は、一つ一つに意味があり、効率よく作業をする為に、前述した順番があり、その中には、危険を回避する為に、守るべき注意事項がありました。

様々な行程の中にも奥の深い意味があり、ただ作るのではなく、きちんと計算された上で、着実に作業を行ってゆくこ

とが大切だと実感しました。工具や材料のひとつをとっても、各部の名称があり、それらの役割を頭に入れることで、技術が向上するのではないかと思いました。

二年生になってからは、電気のことについて学び、技術は、科学の要素も含んでおり、一年生のときとは違う視点で学んでいけそうです。これからの技術の授業で不可欠なのは、前述した知識とともに、科学の知識も必要だと思いました。

続いて、家庭分野においては、「衣食住」の基本と知識を学んできました。

「衣」の單元においては、繊維の種類と特徴や、衣服のコーディネート、衣服の取り扱い絵表示の意味、運針の仕方、エプロンの作成やミシンの扱い方等を学びました。中でも普段何気なく着ている衣服についている取り扱い絵表示には、洗濯の仕方や、注意すべき漂白剤、アイロンの規定温度や方法、干し方、液温の規定温度、手洗いか洗濯機かの指定、クリーニングする際の注意点などがあり、衣服一つ一つの性質に合わせた扱い方が多様にあることがわかりました。一口に洗濯といっても、このようなことに注意しながら行うことが不可欠だと感じました。

「食」の單元においては、食品の栄養と栄養素や、献立の立て方を学びました。栄養素を知れば、体に必要な栄養所要量の理解も深まり、バランスよく食品群別に摂取できるようになり、健康的な生活を送ることができるのだと実感しました。一日三度の食事を、栄養を意識しながら、おいしく食べることが、生きていく上で重要な要素だと思いました。

「住」の單元においては、核家族化や少子化などの現代家

族の変化や、住まいの工夫等を学びました。出生率が過去最低の一・二五を記録し、深刻な少子化問題への対応策の必要性や、住まいとは、人にとって安心できる場所であり、心からくつろげる空間であることが改めてわかりました。

技術・家庭とともに学んで、日常の生活とともにかかわりが深く、生活する上での予備知識や、留意事項などをより理解できましたし、快適に生活していく処世術を身に付けられるよい機会になっていると思います。これからも、このような視点で、技術・家庭の授業を受けたいと思っています。

将来に向けて

葛飾区立一之台中学校 三年

吉 田 琴 美

学校で家庭科の授業をやっているのは、自分達が将来自立した時に、生活に困らないようにするためではないかと思う。日常生活の、衣食住のどれに関しても、家庭科で学んでいることは、必要になってくると思う。

衣に関しては、将来自分の洋服を縫ったり、やがては、自分の子供の服も縫うこともあると思う。今の世の中は物が豊富にあるので、なんでも買ってしまえば簡単なことだが、資源を大切にするためにも、自分の洋服を子供服にリフォームしたりすることも大切なことだと思う。家庭科でやっているあみ物も、子供に何か作ってあげたいと思います。

食に関しては、特に家庭科の授業は大切になってくると思

う。調理実習で肉だんごスープ・冷し中華などを作った。私が包丁を使えるようになったのは小学二年生の頃だが、実習で包丁の使い方や火の加減の調整など実際の生活に役立つことを、いっぱい学んだ気がする。母も仕事をしているので、家では母と一緒に料理をする時間がほとんどない。だから、母から教えてもらうこともないので、学校での調理実習は、私にとってとてもよい体験となっている。また家庭科の授業では栄養素のことも学んだ。ビタミンやミネラルを少しずつとることが必要であること、という食品にどういう栄養素が入っているかなどを学んだ。今の時代は高齢者が多いけれど、寝たきりの高齢者や障害のある高齢者も多い。自分たちが将来健康で長生きできるように、毎日の食生活はとても大切だと思う。私の祖母は今七十才ですが、とても元気です。なるべく、一日三十品目をとるようにしているそうで、食生活にはとても気を配っています。病気になるために、栄養のバランスを考えながら毎日の献立を考えていくのは大切なことだと思う。特に、今の私達は昔の人に比べて、外食店などのファーストフードを食べたり、コンビニエンスストアでサンドイッチやおにぎり、弁当などを買って済ませてしまうことも多いと思う。テレビで見たことですが、最近の若い主婦は自分で料理をしないで、コンビニエンスストアで買ったたり、でき上がったおそうざいを買ったりして、自分で調理することを、おろそかにしているそうです。食に関して私達は一人一人がもっと意識していった方がいいと思う。それと今の社会は、男女共に働く時代なので、男子も家庭科の授業を受ける必要があるのだと思う。

住に関しては、昔の家のつくりと現代の家のつくりのちがいなどを学んだ。古い家はどんなにわさね、ヨーロッパ風の新しい家が建ち並んでいる。大きなマンションに住んでいる人もたくさんいる。しかし同時に、アスベストの問題やいろんな建築材料の問題も起きている。私達はなんでも新しいものを、取り入れるのではなく、昔の人達の生活のよい点を受けつぎ、そこに新しいものをつけたりしていく必要があると思う。住まいの工夫も私達の健康を継続するために必要なことだと思う。そうしたことを学んでいくのが家庭科の授業だと思う。だから実際の生活に一番密接した授業だと思いました。

今まで、なぜ家庭科の授業をするのかと考えたことはなかったけど、こうして考えてみると大切な授業なのだと気付きました。

私の家庭科への思い

江戸川区立瑞江中学校 三年

寺 澤 美 咲

私は、家庭科が大好きです。その中でも、特に被服、調理、保育が好きです。今までに作ってきた作品は、数多くあります。

私が、縫い物やお菓子作りを始めたのは、五歳ぐらいの時でした。母が、作っているのを見ていたり、手伝っているうちに「私もやりたい」と思ったのが、きっかけだったと思います。

ます。それからずっと家庭科が好きになっていきました。

被服では、一針一針刺している時は、時間も忘れて夢中になり、楽しんでやっています。作っている途中、上手いかなかったりすると、イライラして投げ出したくなった事もありました。でも決して諦めずに、最後まで作り遂げます。すぐに出来上がってしまう物より、難しくて時間のかかった物の方が、出来上がった時の喜びも大きいです。自己満足かも知れませんが。出来上がった物を、人に見てもらうのも喜びの一つです。

お菓子を作る時も同じです。同じ物を作ってもその時々で、出来上がりが違います。材料は同じでも、上手く出来る時もあれば失敗の時もあります。上手く出来た時は、まず私自身が嬉しくなり、早く友達にプレゼントしたくなります。そして

「美味しい。」と言ってももらえた時は、更に嬉しくなります。失敗してしまったとしても、次はどうすれば上手く出来るか考え、またチャレンジします。私は失敗しても諦めずに最後までやり遂げます。

私は今、中学三年生です。作る楽しみ、作る喜びを、もっと実感したいと思ったので、高校は家庭科を専門とした学校に進みたいと思っています。高校では、縫う技術等様々な事を身に付けたいと思っています。

そして私は、将来舞台衣装や特殊な衣装を作って、衣装を作る喜びと、衣装を着て踊る人の喜びを共に分かち合えることが出来たら、素晴らしいと思います。それは、私にとってとてもプラスになることだと思えるからです。私の作った衣

装を着て、踊る人の楽しそうな姿をいつか見ることが出来れば良いと思います。

将来の夢を叶えるために、家庭科の授業を受ける時の私は、物凄く真剣になります。大好きな家庭科の授業だからこそ、他の授業よりも更に集中して受けます。実習の時は、「誰よりも丁寧な、誰よりも綺麗に、誰よりも一番」を目指しています。時には、ライバル意識をもってしまうこともあります。けれど戸惑っている友達には、その場で手助けをしてあげたりします。自分が終わる、友達が終わっていない時は手伝ったり、教えてあげたりしますが、その子の作品が完成した時、作った本人が、喜ぶ顔を見て私も何故か嬉しくなるのです。手伝ってあげたからでしょうか。私が、少しでも力になれたのなら、それは嬉しいことです。

物を作ることに。人にあげること。もらった人の喜んでいる顔を見ているだけで、私は「プレゼントして良かった。また作ってあげよう。」と思います。

私にとって家庭科とは、日常生活で一番身近な教科であり、一番興味があり、一番得意とする教科でもあります。だから、三年間家庭科の選択授業を取って来ました。今、選択授業では、ワンピースを作っています。これを作り上げた時も、また喜びが溢れて来ると思っています。この喜びと作り上げた達成感があるから、ここまで好きであり、続けて来れたのだと思います。

これから家庭科での高度な技術を身に付けて、難しい作品に挑戦していきたいです。

看護師という夢

愛国中学校 三年

玉城 明日香

私の将来の夢は看護師になる事。小さい頃からの夢であった。母が看護師の為、私は看護師になるんだ、と思って育ってきた。なので、他の職などには見向きもなかった。

自分の血は平気でも、人の血は凝視することができない。(そんな見る必要などないのだが)これでは看護師になどない!と危機感を感じた私は、小さい頃から特訓をしていた。その特訓というのは自分が考えて行っているだけであって、母が言ったわけでも何でもない。特訓の内容だが、ただテレビなどでやっている、救命救急二十四時などを見ることがある。少しでもそういった物を見て行くにつれ、慣れて行くのではないか、という幼いながらの考え。だが、実際にやってみても慣れるということとはなかった。

このままでは、と思う私に決定的な事件が起きた。夏休み前の、丁度中間試験最終日の下校中だったと思う。いつものように金町でバスを降り、電車に乗り換えるため歩いていた時だった。前におじいさんがよろよろと歩いていて、私が横目で追い越した後、何かが倒れる音と一緒に、あのおじいさんが持っていた石鹸みたいなものが、前を追い越し、滑って行ったのだ。ハッとして足を止め振り返ると、倒れたおじいさんが視界に入った。周りも一瞬の出来事に、動揺が隠せない。もちろん、私もそう。自転車を押していた男性の方がお

じいさんに駆け寄る。そして、何人かの女性の方が駅係員さんに告げに行く、その中、私はただおじいさんを見つめることしか出来なかった。頭の下から出る血が、ゆっくりと範囲を広げて行く。目は開いてはいるものの瞬きはせず、動きもしないおじいさんを、ただただ見ていることしか出来なかった。その時は血が怖いとかそんな事は考えていなかった。振り返った瞬間から時間がゆっくりと過ぎて行く様だった。一秒一秒がとても長く感じられた。結局私はそこにぼうっとつたっているだけ。家に帰ると母がいた。家に帰るまでのことは何も覚えていない。母に話すと、しょうがないよね、と言っていた。しかし、私は自分に腹が立ってしょうがなかった。看護師になりたいと思っていたからではなく、人間として。なんて無力なんだろうと。悲しくて悲しくてしょうがなかった。人間の命とは、ここまで儚いものなのか。あのおじいさんがどうなったかは、私は知らない。途中で帰ってきてしまったから。初めて死の正体を見た気がした。死とは私達のすぐ隣と一緒に歩いているものなのだ、と身をもって実感した。最初は恐怖以外の感情はなかった。ショックで、怖くて、悲しくて、腹が立って：色々な感情が、次に私を襲った。声を上げて泣く、というよりも、静かに涙がほほを伝うという表現の方が適切だろう。いかに今まで私が幸せに過ごして来たか、というのが分かった。

ふと考えた。もしあの事が看護師になった私の前で起こったら：。はたして対処できるだろうか？進歩があるのだろうか？もちろん、それでは看護師として無責任すぎる。だが、不安で不安で仕方がないのだ。やはり看護師には向いていない

いのではないかと。

そして、夏休みも終わりに近づいたある日、私は母に連れられ、映画を見に行った。映画と言っても、小学校のPTAの仲間に勧められて見に行くような、一般人・映画のプロではない方が作ったものだ。夢を叶える、世界に虹を架ける、といったもので、本当に笑えた。やっている事は無茶苦茶で、本当にただ自分達の夢の為だけに一生懸命だった。だが、その姿がとてまかつく良く、勇しく見えた。一人一人が輝いていて、無茶だと思っていたことが出来た時、私も涙を流して喜んでいた。そう、まるでその中の一人のように。

監督さんの話は、興味を引くものばかりであった。その監督さんは、えらいプラス思考で、人生を一杯楽しんでいるぞというオーラを放っていたように私には見えた。映画を見て、話を聞いて、夢を叶える、望みを叶える事の大切さ、大変さ、楽しさ、辛さが一気に伝わってきた。そして、それは自分自身もそうだが、人にまで感動を与えられる力をもっている。

「世界中の人々の涙と愛が集まれば、それこそ、何よりも勝る武器になる」ちょっと形は違うが、そんな事を言っていた。それと同時に、「笑顔が一番」とも。そうだったのだ。私は忘れていた。何で看護師になりたいのか、母親がきっかけかもしれない。だけどそれはあくまでもきっかけであって、それ以上でもない。思うきっかけと、私自身が抱く思いとは違う、別の物。私は人が笑顔で「ありがとう」と言ってくれる、言ってもらえる瞬間が大好きだ。その時のその人は一番輝いていると思う。「ありがとう」その言葉一つで強く、優しくなれる気がする。一歩前進する。だから私は看護師になりたい。

人と触れあい、笑顔をもっともって沢山見たい。笑顔と愛と優しさを配る、そんな看護師になりたい。全ては笑顔のために。

監督さんに色紙にサインを頂いた。その時にサインと一緒に書いて下さったのは、「動けば変わる!」という言葉。「何事も、まず一步踏み出す事が大事。やってみなければ変わらない。やってみたら変わる。絶対に変わる。頑張ってね。」と口で付け加えて下さった。

私の歯車が動き出した。看護師になる為、動き出した。この先どうなるのかは分からない。ただ、あの時誓ったのだ。同じ失敗は二度と繰り返さない。だから私は看護師になるという夢を諦めない。全ては人々の笑顔のために。そして、自分の花を咲かせるために……。

保育体験プログラムで得たもの

筑波大学附属中学校 一年

坂 慈 子

「病気の人に、ごはんをあげなくちゃ。」
「お弁当を作ろう。」

と、四才児の女の子が言った。私は少しとまどいながらも、プラスチックでできた食べ物を皿に盛り始めた。

「先生、大丈夫?」

「お弁当を持ってきたよ。」

声が聞こえ、後ろを振り返ると、こどもの城幼児グループの

先生が、大きなやわらかい積み木で作られたベッドに寝かされていた。あお向けで、足にも積み木が置かれている。先生が病人ということらしい。女の子は、レースのきらきらした衣裳を着て、お弁当を届け、先生の寝ているとなりへ置いた。
「先生って大変だ。」

私は心の中でつぶやいた。

これは、私が夏休みに、こどもの城主催の小中学生保育体験プログラムに参加した時のことである。私は夏の一日、十時から十四時まで、三〇五才児クラスの保育ボランティアになった。子供達十九名と先生方三名のクラスだった。それは、予想していたより、ずっと楽しかったが、ぐったり疲れた一日だった。

その日、こどもの城に向かう電車の中で、私は、子供たちは仲良くしてくれるだろうかと不安だった。しかし、そんな心配は全くいらなかった。保育の部屋に入り、端の方で待っていると、四才児の男の子が話しかけてくれた。

「カブトムシ見たい?」

と言って、飼育ケースの前に私を連れて行き、

「もう見たよ、ありがとう。」

と言っても、何回もふたを開けて見せてくれた。最近成虫になったらしい。何回見せても、そのたびにうれしいようだった。

やがて全員が登校したところで、自己紹介をすることになった。私の番が来た。

「坂 慈子です。十二才で……。」

と、言う

「えーっ。」

何人かの子供が「十二才」と言ったとたんに声を上げた。私はなぜか顔が熱くなった。ものすごく年上だと驚いているのかなと思った。

「好きな色は水色、好きな遊びは水泳です。」

「わーっ。」

また声があがって拍手も起こった。かわいいなと思った。

名前、年令、好きな色と遊びを言うだけであつたが、とても時間がかかった。何を言うか忘れてしまう子供もたくさんいる。立ち上がっても、黙って立っている。すると先生はやさしく、

「あなたの名前は何ですか。」

と聞く。名前が言えても、また黙ってもじもじしている。先生はまた、

「何才ですか。」

と聞く。何回続いても先生は優しくかった。子供達も長い時間、しんぼう強く聞いていた。騒ぐ子供には、先生が声をかける。この自己紹介は、毎回言うことを変えて、何回も行っているそうだ。

保育のカリキュラムは、着替えてビニールプールでの水遊び、給食、自由遊びと続いた。着替えも、給食の準備も、食べるのも、どれもとても時間がかかった。服をひとつひとつ着ていくのがおそい。手伝ってやりたくなつたが、がまんして見守つた。給食は、私も子供と同じものを食べた。鮭ちらしと肉じゃがとみそ汁、コーンとオレンジもついていた。子供の茶碗は、とても小さかつた。

そして自由遊びの時間、初めに書いた先生を病人にして、ベッドを作つて寝かせる係、お姫様の変装をしてはげます係、お弁当を作る係に分かれての遊びとなつたのだつた。女の子は、お姫様になるのがとても楽しそうだった。私にも覚えがある。女の子の心の中では、美しいドレスをまとつたお姫様になつていたんだろうなと思った。

あつという間に帰る時間になつた。私はもうへとへとになつていた。迎えに来たお母さん方に、先生は丁寧な今日一日の出来事を話していた。私は、先生が子供達の様子をよく見てよく分かつていることに気がついた。一緒に遊んでいるだけのように見えるのに、先生は目や耳をフル回転させていたのだつた。私に、今日一日のことを話せと言われても、自分が出たことしか話せなかつたと思う。

四時間の保育体験だったが、保育の仕事がどんなものか感じ取ることができたと思う。いつも笑顔で優しく、子供がしたいようにさせてあげているように見えても、子供の様子をしっかりと見ていて、生活がうまく行くようにリードしているのだということが分かつた。

帰り道、本当に疲れたと感じた。いまだ、人なつっこく私と遊んでくれた子供の顔が心に残っている。

初めてのボランティア

筑波大学附属中学校 一年

松 本 由 美

私は、この夏休みに、生まれて初めてボランティア体験をしました。私の住んでいる墨田区が「夏休み体験ボランティア」を募集したので、やってみようかなと思ったからです。説明会に行くと色々なボランティア団体が受け入れてくれているようでした。私はその中で、「リハビリテーション病院でピアノを弾く」というのと「日本語を勉強する外国の方の補助をする」を選びました。趣味で続けているピアノを生かして、患者さんたちを元気にしてあげたかったというのと、私もこの春から外国語である英語を勉強しているので、少しでも同じような立場の方たちの力になりましたからです。

ピアノボランティアの初日、私は、七月にピアノの発表会で弾いた「乙女の祈り」の楽譜を持って、担当の看護師さんを訪ねました。看護師さんの話では入院されている患者さんたちの為に三十分くらいのミニコンサートをして欲しいとのことでした。軽い気持ちで楽譜一枚持って行った私は困りました。その時、私が完璧に弾ける曲は「乙女の祈り」だけでした。担当の方と話を終えて、電子ピアノが置いてある玄関ホールに戻ると、車イスの方がたくさん集っていました。私は、自己紹介をして「乙女の祈り」を心を込めて弾きました。そして「今日は一曲しか皆さんにお聞かせできませんが、次回は何曲か練習してきます」と言うと暖かい拍手をた

くさん頂きました。帰りぎわ、両足のない車イスに座った女性からにこやかに、「上手だったね。私、歌が好きだから、今度は歌えるのも弾いてね。」と、声をかけられました。両足がなくてもニコニコと明るい姿にちょっとびっくりしました。そこで次回は、私の大好きなクラシック曲「人形の夢と目覚め」と、歌える曲として「月の砂漠」、「地上の星」、「知床旅情」を練習して行きました。すると、前回よりさらに多くの方が集ってくれていました。このように毎回一〜二曲のクラシック曲と、三〜四曲の歌える曲を練習して夏休み中に五回、病院へ行きました。歌詞はパソコンで手作りして持って行きました。ピアノを練習して、歌詞を作っていると大変だな、面倒だなと思う時もありましたが、毎回多くの方が集ってくれるし、時にはミスする事もある私を暖かく応援してくれるので、がんばりました。最終の日、玄関ホール中に集ってくれた方全員で、私の好きなテールの唄を歌いました。テールの唄を知らない方もいましたが、一生懸命憶えて歌ってくれました。皆、明るく前向きでした。私のピアノで少しでも患者さんを励ましたいと思ったボランティアでしたが、終わってみると私の方が逆に元気をもらい、ピアノが少し上達していました。

日本語ボランティアは、八月の一ヶ月間、週一回の全部で四回ありました。私はそのうち三回出席しました。私は、中国から来た二十代の男の方セキさんの担当になりました。セキさんは日本に来たばかりで、ほとんど日本語が話せません。私がボランティア志望の動機で、四月に英語をならい始めたばかりなので、同じように日本語をならい始めたばかりの方

の手伝いをしたいと言ったら、日本語ボランティアの先生がセキさんの担当にしてくれたのです。初日セキさんは、先生の指導の下、あいさつと自己紹介の練習をしました。セキさんは一生懸命ノートをとっていました。私は、なるべくはっきりと発音するように心がけて話しました。私が毎日、普通に使っている日本語ですが、セキさんにとって発音しやすい言葉としにくい言葉があるようで、何回も先生に直されてどもってしまう様子を見てみると、私も思わず「がんばれ」と思いました。三週目は用事があり休んでしまいました。そして最後の四週目に行ってみると、セキさんは時間、曜日、日にちの言い方をクリアーし、大きい小さい、長い短い、高い低いをやっていました。すごい進歩でびっくりしました。最後にセキさんが私に日本語で、「ありがとうございました。」と言ってくれました。私も思わず「こちらこそありがとうございました。」と返しました。これから、私は英語を、セキさんは日本語をがんばっていきなさいと思いました。

最初、中学生になったことだしボランティアでもやってみようかなという軽い気持ちで始めた、初めてのボランティアでしたが、私にとってもとても大きいいい経験になりました。最初、私はボランティアというのは何かを相手に、無償でしてあげる事と思っていました。しかし終わってみると、私が皆さんから頂いた物の方が多かったかもしれません。又、来年も挑戦してみたいと思いました。

現場で見た作る楽しさ

筑波大学附属中学校 二年

田 中 小百合

小五の夏に、『十二歳のハローワーク』と称して、自分の将来になりたい職業の弟子入りをするというものを総合的な学習の時間の授業で行った。

当時私がなりたかった職業は、建築家。テレビや雑誌で見かける魅力的な建物を見るたび、建築家というものに興味を持っていた。だが、私はその職業に対して「あこがれ」程度にしか思っていなかったのかもしれない。ハローワークの話を聞いたとき、弟子入りなんて簡単にできないし、正直少し面倒だと思っていた。

たまたま、私の親戚の知り合いで、建築家をしている女性がいる、とあるレストランを改装中ということだったので、私はその女性の弟子入りをすることにしたのだ。

初めてその女性に会うときは現場に行くという緊張感と、弟子入りして私は何をすれば良いんだろうという不安でいっぱいだった。

丁度壁や床の張り替え作業などをしていた現場の、少人数でアットホームな雰囲気なのに、私を「こんな所にいて良いのか」という落ち着かない気持ちにさせた。

女性に会ったとき、心から安心したのを今でも覚えている。その人は笑顔が素敵な人で、設計図に書かれた細かい数字や図を見て、こんな難しそうなものをあの綺麗な人が書いたの

か、と変な感想を持っていた。

現場のありとあらゆる説明を受け、私が幼稚な質問をたくさんしたときも丁寧に、笑顔で答え続けてくれた。私はその女性が私に対して、大人と同じように説明し、接してくれたのがとても嬉しかった。自分が認められ、将来の道を着実に進んでいるような気がしたのだ。

私はそれまで、建築家というものは部屋に一人こもって、自分が納得いくまでひたすら図を描き続けるものだと思っていた。でも、このハローワークを終えてからは、その考えが大きく変わった。もちろん、一人でたくさん図を描き続けることもあるかもしれないが、実際は自分で現場に行っておナーの方の意見を聞いたり、あのアットホームな雰囲気で作業者や業者さんたちと打ち合わせをしたり、表で人と触れ合う機会がたくさんあって、予想以上に明るい仕事だと思った。女性は、「作業が本格的になってからロクに食事もトイレもできなくて寝不足気味。」と言っていたが、建築家という職業は楽しいという。

私は実際に現場で建築家の仕事を見て、「楽しい」という言葉に納得できた。細かい指示を出しながら自分の意見を言う女性は、やはりイキイキとしていたし、寝不足を感じさせないほど楽しそうだった。

こういう仕事の楽しさというのは、現場にいないと分からないものだなぁと感じさせられた。でも、『本当の楽しさ』は実際に働いている彼女たちが一番よく分かっていると思う。私が弟子入りしてみても見つけた小さな楽しさではない。自分の求めている職に就くまで長い間努力してきて、その努力を

活かして今、仲間と一緒に誰かのためにモノを作り上げているんだ、という楽しさではないだろうか。あるいは、他の大きな楽しさ。

モノ作りというのは本当に奥が深い。考える人がいて、作る人がいて、使う人がいる。考えたり作ったりする楽しさがあったって、使う楽しさがある。私は今、工業デザイナーを夢見ている。職業は違っても、それが必要とする誰かのためにモノを作るのは同じだ。私が作る立場から見つけた楽しさを胸にとどめながら、夢をあきらめずに生きていきたい。

